

令和4年度指定 文部科学省事業

「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」

第2年次 実施状況報告書



福岡県立八幡高等学校

【目次】

1. 本校の状況と事業の概要	1
2. 事業運営体制(運営指導委員会・コンソーシアム・学校担当者)	2～6
* 申請書の概念図	
* 年間事業(申請書の計画書の内容で実施した内容の一覧)	
3. 運営指導委員会議事	7～11
4. コンソーシアム運営会議議事	12～17
5. 教科科目横断型授業	18～22
6. 総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」	23～48
7. 会議議事録(事前説明会、高校 CN オンライン研修 5 回)	49～59
8. 会議議事録(高校 CN 対面研修 3 回、高校 CN 全国フォーラム)	60～66
9. 先進校視察(訪問先、訪問日、訪問者等の基礎情報のみ)	67
10. 会議録(一覧)	68～69
11. 成果概要図	70
* 巻末資料	
・中学生配布パンフレット	
・学校ポスター	

1. 本校の状況と事業の概要

(1) 学校を取り巻く状況

【地域】

本校が位置する北九州市八幡東区は、官営八幡製鉄所があった地域であり、明治以降、鉄鋼産業を中心に日本の近代化の一翼を担ってきた街である。一方で高度経済成長期を支えた八幡製鉄所がフル稼働したことで「八幡の空には七色の煙が上がる」と言われたほど、大変な公害を生み出したが、そこから女性たちを中心に環境問題を訴える市民運動が巻き起こり、市民・地域全体で改革へ取り組んだ結果、環境問題から回復した。

現在では八幡東区を含む北九州市としては「SDGs 戦略」を明確に打ち出していることも評価され、経済協力開発機構(OECD)によってアジア初のSDGsモデル都市に選定された。八幡東区はSDGsで触れられている生産性やエコシステムの中で、持続的な環境保全を目指す先進的な地域である。

【学校】

本校の理数科は平成23年度から平成29年度まで7年間スーパーサイエンスハイスクール(以下、「SSH」という。)に指定され、産官学と連携しながら、次世代の科学イノベーション人材の育成に向けて取り組んできた。また、卒業生は大学・企業の研究者も多く輩出しており、約30年間にわたる理数科における教育は一定の成果をあげている。

一方普通科は、理数科と切磋琢磨しながら教育活動を展開し、特にSSH指定期間は、著名な研究者等による講演会を共に聴講し、質疑に参加する等、知的好奇心を刺激する機会に恵まれた。また、学問領域を融合させて事象を分析する視点や思考方法、学問に向かう主体性を育成する活動に取り組んでいる。

(2) 事業の概要

令和3年1月の中央教育審議会答申等において、新時代に対応した高等学校教育等の在り方について、高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化や、教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成が提言された。

令和3年3月31日には学校教育法施行規則等の一部を改正する省令等が公布され、高等学校等の特色化・魅力化に向けて、「普通教育を主とする学科」として「学際領域に関する学科」や「地域社会に関する学科」等が設置可能になった。

本校は、新学科の設置に向けた検討等を行う高等学校等として、令和4年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」において指定(学際領域に関する学科)を受けた。

本事業の指定を受けて、以下の2点をねらいとした。

(ア) SSHの研究テーマであった「科学智の統合」の成果を普通科にも汎用させ、現在も組織的に実施している教科等横断型授業や、SDGs探究(「夢現プロジェクト」)をより魅力のある教育方法、カリキュラムとして開発する。

(イ) 学問の専門深化による学問領域同士のコミュニケーションの喪失を克服し、文理分断的思考から脱却した人材を育成する。

理数科が特にSSH指定の中で探究してきた「科学智の統合」の理念を、新学科「文理共創科」に継承・発展させることによって、学問の面白さを実感し、知的好奇心に基づいて主体的に学ぶことで、学問領域同士のコミュニケーションを生み出し、文理分断的思考から脱却し、持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする人材を育成する。

2. 事業運営体制

○運営指導委員会

(敬称略)

氏名	所属	備考
石丸 哲史	福岡教育大学 副学長	運営指導委員長
馬渡 寛子	福岡県教育庁 教育振興部 高校教育課長	
喜洲 淳哉	北九州市八幡東区役所 区長	
眞鍋 和博	北九州市立大学 地域創生学群 教授	
栗原 博巳	北九州市立板櫃中学校 校長	
南里 幸一	北九州市立高見小学校 校長	
齋藤 克義	JICA 九州センター 市民参加協力課 課長 福岡県本部長	
内村 尚俊	学校法人福原学園九州女子大学 人間科学部 心理・文化学科 特任教授	

○コンソーシアム

(敬称略)

氏名	所属	備考
西田 将浩	一般社団法人 OCES 代表理事	コンソーシアム運営委員長
横山 哲子	北九州市役所 企画調整局 企画政策部 企画課 プロジェクト推進担当係長	
大山 貴稔	九州工業大学 教養教育院 准教授	
永末 康介	北九州市立大学 基盤教育センター 教授	
阿武 勲	社会起業大学 九州校 運営事務局・教頭	
松岡 俊和	タカミヤ環境ミュージアム 館長	
松永 康志	シャボン玉石けん株式会社 営業本部 本部長	
西山 慶	大英産業株式会社 社長室 コミュニケーション推進課 課長	
大田 純子	公益財団法人地球環境戦略研究機関 北九州アーバンセンター 研究員	
村岡 由利江	日本国際連合協会 福岡県本部	

○学校担当者

(敬称略)

氏名	所属	備考
神谷 輝弘	福岡県立八幡高等学校 校長	
山本 博文	福岡県立八幡高等学校 参事兼事務長	
新澤 和幸	福岡県立八幡高等学校 教頭	
中尾 貴里恵	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 教務部	
山吹 二大	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 進路部	
平田 鷹司	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 生徒指導部	
廣濱 一郎	福岡県立八幡高等学校 指導教諭 研修部 新学科推進課 課長	
鳥井 敦子	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課	
松永 一平	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課	
大塚 悠衣	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課	
應地 広久	福岡県立八幡高等学校 講師 研修部 新学科推進課	
渡会 輝空	福岡県立八幡高等学校 講師 研修部 新学科推進課	
野中 朱実	福岡県立八幡高等学校 教諭 教務部 広報課 課長	
熊丸 修二	福岡県立八幡高等学校 教諭 第2学年主任	
井手 素子	福岡県立八幡高等学校 教諭 進路指導部 ガイダンス課 課長	
川津 佐代子	福岡県立八幡高等学校 教諭 進路指導部 ガイダンス課	
三浦 大地	福岡県立八幡高等学校 教諭 進路指導部 アセスメント課 課長	
真子 静佳	福岡県立八幡高等学校 普通科改革支援コーディネーター	

【福岡県立八幡高等学校】学際領域学科（設置（令和6年度））

学際領域学科設置の目的

持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする人材の育成

新たな知を生み出す柔軟な創造力

知の統合

自然科学系

人文社会学系

架橋

特色・魅力ある教育の概要

学校設定教科
「知の統合」
教科科目横断型授業

複数の教科科目を融合

- ・ 学問と社会の繋がりの実感
- ・ 学問の意義の感得
- ・ 多角的な視点・思考の獲得
- ・ 知識から知恵の創造
- ・ 高度な思考力・判断力・表現力の育成

ボーダレスな課題を
分析し真理を
見極める視線

SDGsの達成に向けて

- ・ 課題探究的な学習
- ・ 計画に基づく実践行動
- ・ 成果発表会とコンテストへの参加
- ・ 主体的な行動力と旺盛な学びに向かう力の育成

総合的な探究の時間
「夢現プロジェクト」

往還・相乗効果

関連機関との連携・協働体制の構築方法

運営指導委員会

指導・助言

コンソーシアム

八幡高校



コーディネーター

企業・高等
教育機関

- ・ SDGsの目標達成に向けた指導助言
- ・ 学際的学びに関する指導助言

行政機関
教育委員会

- ・ 社会の実態の情報提供
- ・ 政治行政的知見の深化
- ・ カリキュラム編成の指導助言

国際機関

- ・ 国際活動を行っている団体による情報提供と専門的知見の深化

地域

- ・ 夢現プロジェクトを介した学校と地域との連携

* 令和5年度の年間事業

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	<ul style="list-style-type: none"> 学校設定教科「知の統合」の試行実施 総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の年間計画確定と領域別担当教員の確定 	<ul style="list-style-type: none"> 運営指導委員会、コンソーシアム構築に向けた校内体制の整備 運営指導委員会・コンソーシアムの設置 コーディネーターの配置
5月	<ul style="list-style-type: none"> 公開授業の検討 研究発表会の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回運営指導委員会 第1回コンソーシアム運営会議 第1年次実施状況報告・令和5年度実施計画書等に係る指導助言
6月	<ul style="list-style-type: none"> 学校設定教科「知の統合」の評価方法の開発・運用 	<ul style="list-style-type: none"> 授業力向上アンケート(前期)の実施
7月		<ul style="list-style-type: none"> 第2回コンソーシアム運営会議 生徒のSDGs各研究班との協議 「高校魅力化評価システム」を用いたアンケート調査の実施(意識調査①)
8月	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の活性化 校外活動の形態について検討、コンソーシアムの活用推進 	
9月		
10月		
11月	<ul style="list-style-type: none"> 学校設定教科「知の統合」の評価方法の改善・運用 学校設定教科「知の統合」の公開授業実施・協議 先進校視察 	<ul style="list-style-type: none"> 第3回コンソーシアム運営会議 「夢現プロジェクト」中間発表会 授業力向上アンケート(後期)の実施

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
12月	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の公開授業(オンラインを含む)の開催 先進校視察 	<ul style="list-style-type: none"> 第4回コンソーシアム運営会議 夢現プロジェクト成果発表会 次年度への課題整理
1月		<ul style="list-style-type: none"> 意識調査②の実施 意識調査①・②の分析
2月	<ul style="list-style-type: none"> 学校設定教科「知の統合」の評価方法の確立・運用 	<ul style="list-style-type: none"> 第2回運営指導委員会 成果報告、今後の課題 生徒、職員対象の意識調査及び分析結果の共有と次年度事業計画への反映 令和6年度事業の展望
3月	<ul style="list-style-type: none"> 次年度総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の年間計画検討 学校設定教科「知の統合」の振り返り(研究紀要作成) 	<ul style="list-style-type: none"> 次年度運営指導委員会の企画・検討 次年度コンソーシアムの企画・検討

3. 運営指導委員会議事

(1) 第1回運営指導委員・コンソーシアム合同会議

【目的】

本校における「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の第1年次実施状況と令和5年度実施計画を運営指導委員およびコンソーシアム構成員に報告し、改善に役立てる。

【実施日】

令和5年5月24日(水) 16時15分～17時45分

【場所】

本校 会議室

【次第】

- 1 学校長挨拶
- 2 県教育委員会挨拶
- 3 運営指導委員・コンソーシアム構成員紹介並びに本日出席者の紹介
- 4 運営指導委員長・コンソーシアム運営委員長選出
- 5 「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」
第1年次実施状況報告について
- 6 令和5年度実施計画書について
- 7 質疑応答及び指導助言
- 8 その他

【参加者(敬称略)】

[運営指導委員]

石丸 哲史(福岡教育大学)；鈴木 寛(福岡県教育庁)；喜洲 淳哉(北九州市八幡東区役所)；齋藤 克義(JICA九州センター)；内村 尚俊(学校法人福原学園九州女子大学)

[コンソーシアム構成員]

西田 将浩(一般社団法人OCES)；横山 哲子(北九州市役所)；大山 貴稔(九州工業大学)；永末 康介(北九州市立大学)；阿武 勲(社会起業大学九州校)；松永 康志(シャボン玉石けん株式会社)；西山 慶(大英産業株式会社)；大田 純子(公益財団法人環境戦略研究機関)；村岡 由利江(日本国際連合協会福岡県本部)

[会議出席者]

菱谷 涼太良(福岡県教育庁)；神谷 輝弘(校長)；山本 博文(参事兼事務長)；新澤 和幸(教頭)；中尾 貴里恵(主幹教諭)；平田 鷹司(主幹教諭)；廣濱 一郎(指導教諭)；鳥井 敦子(教諭)；松永 一平(教諭)；大塚 悠衣(教諭)；渡会 輝空(講師)；野中 朱実(教諭)；熊丸 修二(教諭)；井手 素子(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】

- 「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」第1年次実施状況報告(学校より第1年次実施状況を報告)
- (委員)；(夢現∞プロジェクトに関して)第1学年生徒への引き継ぎの際の、生徒たちの様子はどのようであったか。
- (学校)；第2学年生徒は、自分たちが取り組んできた探究活動の成果を、後輩に自信気にアピールしている様子であった。第1学年生徒は、12月に実施された成果発表会を見て感

- 銘を受けており、発表会に至るまでにどういう段取りで活動を進めていくのか等について積極的に質問し、先輩から細かい手ほどきを受けていた様子であった。
- (学校) ; 引き継ぎを受けて、当時の第1学年(現在の第2学年)の中には、先輩が行っていた探究を受け継ぎ、同テーマに取り組む班が複数出てきている。全く同じことをするのはなく、見方を変えてチャレンジしようとしている。
- (委員) ; 昨年度の委員の活動を通して、コンソーシアムには様々な分野の人が所属しているため、生徒が行っている個々のプロジェクトに対して、もう少し個人的に受け入れてもいいのかなと感じた。生徒がプロジェクトを計画から実施に移す段階に、伴走・ガイダンスが必要なのかなと思う。今年度の計画が具体的に分かれば、我々からガイダンスを行うこともできるのではないかと考える。
- (学校) ; 有難い御意見に感謝申し上げます。先日、教職員にて、生徒を外部に出すときの約束事や危機管理を含めた会議を実施した。それを生徒にフィードバックし、これから動き出そうという段階である。本日の会議資料には今年度の研究計画等は含まれていないが、進路指導部担当教員・コーディネーター間で調整し、皆様にお送りできるようにする。
- (委員) ; 昨年度のSDGs講演会(企業)に関して、寒い中、生徒が体育館に集合して体育座りで話を聴くという状況に疑問を感じた。今後も様々な講演会があると思うが、聴く環境づくりも、改善の余地があれば検討してもよいのかなと思う。
- (学校) ; 昨年度、県立高校においては、1人1台端末が配布されWi-Fi環境も整備された。オンラインで全国どこでもつながることができるというICT機器のメリットを十分に活用しながら検討したいと考える。また、探究活動においては、誠鏡会(同窓会)にも協力要請してアドバイスをもらえる人材を探したいと考える。協力をいただける方の一覧を作成し、コーディネーターを通じて、生徒が自分たちで時間調整等を適宜行っていくということも大事だと思っている。
- (委員) ; 企業訪問については、必ずしも現地訪問せずとも電話やzoom等で柔軟に対応できると考える。生徒とダイレクトにやり取りすることも企業としては可能。早い段階で社会人との接点をつくることで、挨拶の仕方や名刺の渡し方等の基本動作を学ぶ機会にもなるのではないかなと思う。
- (委員) ; 同窓会やコンソーシアム構成員等の探究活動協力者リストに関しては、研究計画書がある程度完成したあとに活用するのがよいかと考える。理由は、そのリストをもとに探究が始まると、生徒を誘導しているような形になってしまうため。また、学校側の会議で決定された外部とやり取りする際のルールは、我々もトラブルを防ぐために知っておいた方がよいと思うので共有してほしい。最後に、昨年度の課題としてアセスメントを挙げられていたが、それ以外で、教科科目横断型授業や探究活動で、どういったところに課題意識があるのか、次回会議時でもよいので共有してほしい。
- (学校) ; 探究活動における外部の方とのやり取りについては、生徒たちの動きを教員が把握しておくためにも、各班担当教員の公的なメールアドレスで情報発信をするように決められている。詳細資料に関してはコーディネーターから皆様へお送りする。

○令和5年度実施計画

(学校より令和5年度実施計画を説明の後、内村前校長より学科名変更の経緯・教科科目横断型授業の評価方法に関して補足説明。)

- (学校) ; (「知の統合科」という学科名に関して)中学校から「八幡高校は総合学科になるのか」という問い合わせを受けることがある。中学校や塾を対象に説明会を実施しているが、今後のコマースの在り方について、広報課担当と共に検討したいと考えている。

○その他

- (委員) ; 現在、八幡高校が抱えている課題は何か。

- (学校) ; ①教科科目横断型授業については、横断しやすい科目と横断しにくい科目での実施バランスの検討と、実施時期が特定の科目や教員に集中しないような計画の策定が必要である。また、評価について、今年度の試行実施により新たな課題が見つかる想定している。②職員全体への情報共有については、これまで取り組んできたことをポータルサイトで閲覧できるよう準備を進めており、課題解消まであと一歩というところである。③意識調査については、他の指定校の実施例の情報を収集している段階であり、検討中の課題である。これから準備を進めていく必要があるという状況である。
- (学校) ; 教科科目横断型授業の実施における教員の負担面については、実態調査をし、改善検討していく必要のある課題である。例えば、外部(コンソーシアム)の方に何らかの形で授業サポート・協力をしていただくことも考えられるのではと思う。また、課題研究や夢現∞プロジェクト、学校行事や研修を通して、文理横断的なものの見方や主体的に学ぶ姿勢を育成していきたいと考える。その先に、文理選択をどうするか等の懸念事項はあるが、校内裁量できる部分は検討し、より生徒の思考が広まり、深まるような環境をつくりたい。さらに、上級学校に進学した際に、高校時代の刺激が生徒たちにどのような影響を与えているのかを調べることによって、本校の関わり方がどのようなものであったのかということが見えてくると考える。それを測ることができる指標について、委員の方の知恵をお借りして検討していきたいと思っている。
- (委員) ; (普通科改革支援事業)は進学のためだけの学力をつける教育ではなく、知を追究し自ら進路を開拓していくような生徒を育てていく挑戦だと思っている。また、教科科目横断型授業と夢現∞プロジェクトの往還による、多角的なもの見方や追究する深い学びの育成をねらいとしている。そのため、教科科目横断型授業でどれだけ深い授業ができるかが1つの課題である。
- (委員) ; 我々も教科科目横断型授業を見る機会があればいいと思う。アーカイブをビデオで残し共有してもらえると、こちらからも意見をフィードバックでき、学校側が応用できる部分もあるのではないかと考える。また夢現∞プロジェクトにおいては、原因を分析したり仮説を立てたりする段階は非常に重要であるため、ブレインストーミングを促すサポートシートの配布だけに留まらないよう、充実した指導が必要であり、需要があればコンソーシアムを活用してもよいと思う。
- (委員) ; 夢現∞プロジェクトにも、理系と文系の融合の視点を入れてはどうか。(サポートシートの中で)理系的な視点・文系的な視点、もしくはSDGs17のゴールの中から必ず2つ〜3つ以上の視点から1つの問題について考えてみようというのを建付けにしてしまえば、横断的なプログラムに通じるのではないと思う。また、今年度の大きな課題として挙げられているアセスメント・意識調査に関しては、意識調査の質問自体を、アセスメントにつながるようなものにしてはどうか。生徒に対し「何を得られたか」「何が変わったのか」を意識調査の項目として置き、その回答を評価の対象とすればよいのではないか。質問項目の内容は非常に重要と考えられるため、配布する前に委員会でコメントする機会があればよいと思う。
- (学校) ; 夢現∞プロジェクトのグループ編成は第1学年末に行っているため、班の中に文系の生徒と理系の生徒が混在している。そこはお互いににとってよい刺激になっており、班活動を終えて教室に戻ったあとも、文系・理系の枠を越えて情報交換を図っているような状況は見られている。
- (委員) ; 知の統合科における教育活動の認知度を上げるために、メディアを活用した方がよいと考えている。例えば、八幡高校卒業生が所属するテレビ局を誘致し授業風景を見てもらい、特集を組んでもらう等。企業として紹介もできるので活用してもらえればと思う。
- (学校) ; 御協力感謝申し上げます。新学科と併せて理数科のPRも積極的に行っていきたい。

(2) 第2回運営指導委員会

【目的】

本校における「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の令和5年度成果を運営指導委員に報告し、改善に役立てる。

【実施日】

令和6年1月30日(火) 16時15分～17時15分

【場所】

本校 誠鏡会館

【次第】

- 1 学校長挨拶
- 2 県教育委員会挨拶
- 3 運営指導委員長挨拶
- 4 運営指導委員紹介並びに本日出席者の紹介
- 5 教科科目横断型授業 成果報告
- 6 総合的な探究の時間 成果報告
- 7 令和5年度事業の総括
- 8 質疑応答及び指導助言
- 9 今後の取組について
- 10 その他

【参加者(敬称略)】

[運営指導委員]

石丸 哲史(福岡教育大学)；鈴木 寛(福岡県教育庁)；喜洲 淳哉(北九州市八幡東区役所)；眞鍋 和博(北九州市立大学)；齋藤 克義(JICA九州センター)；内村 尚俊(学校法人福原学園九州女子大学)

[会議出席者]

菱谷 涼太良(福岡県教育庁)；神谷 輝弘(校長)；山本 博文(参事兼事務長)；新澤 和幸(教頭)；山吹 二大(主幹教諭)；平田 鷹司(主幹教諭)；廣濱 一郎(指導教諭)；鳥井 敦子(教諭)；松永 一平(教諭)；大塚 悠衣(教諭)；應地 広久(講師)；渡会 輝空(講師)；野中 朱実(教諭)；熊丸 修二(教諭)；井手 素子(教諭)；三浦 大地(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】

○学校より「教科科目横断型授業」成果報告

(学校)；2月以降も教科科目横断型授業が実施予定である。最終的な実績については、次年度最初の会議で配布する。今年度実施した「高校魅力化アンケート」では、以下のような回答が見られた。

①様々な分野をまたいで意見を交流することは大切である 肯定的回答 96.7%

②多角的な視点をもつことは大切である 肯定的回答 96.7%

この結果から、教科科目横断型授業での成果を生徒が感じていると思われる。また、今年度は、教科科目横断型授業の公開も行い、各学校から参観又はオンデマンド視聴参観いただいた。評価については、今年度は試行段階としてレポートで実施。

○学校より「総合的な探究の時間」成果報告

(学校)；今年度は、昨年までと比較して、外部人材・機関との連携が強化され、それにより、生徒の調査研究にも広がりが見えた。また、失敗する経験を経て、試行錯誤を繰り返

しながら PDCA サイクルを回すことができた班が多かったと感じる。

○意見交換

- (委員) ; 課題解決のためには、学んだことを社会で実践する必要がある。具体的に進路指導にどのように繋げていくのか。
- (学校) ; 学校推薦型・総合型選抜での受検者数は増加傾向にある。夢現∞プロジェクトの成果を推薦入試に活かせるように指導していきたい。
- (委員) ; 就職を意識している工業高校のように、取組に具体性があるとよい。ロールモデルとして関わることも可能なので、協力していきたいと思っている。
- (委員) ; 教員は、生徒の変化をどう感じているか。
- (学校) ; 普通科・理数科ともに、大学進学に向けて、高校時代の取組を活用できるようになると感じている。普通科・理数科が相互に発表を見せ合うことで、積極的に活動する意欲も上がっている。
- (学校) ; 令和元年度から取組を実施して(種が蒔かれて)いるので、既に変化している段階にある。例えば、校則においても、ある程度生徒の自主性に任せるように変化しており、学校生活を通して、自分はどうあるべきか考える姿勢が身についていると感じる。
- (委員) ; 行政・地域をより多く活用していくとよい。現在、大学生と区役所職員で意見交換を実施する機会を設けている。高校であっても、校内の取組を多く外部へ伝えられると、場やテーマを提示する支援ができる。行政側は情報を持っているので積極的に活用するとよい。
- (委員) ; 「これからの社会を創るのは自分だ」という意識が、生徒に根付いてきていると感じている。学校の教育活動がそのような生徒の育成に寄与しているのは確実であると考える。今後は、アウトカム(非認知能力)の内容を測定できる方法や、これまでの生徒との変化を比較調査できる方法を探すとよい(ベネッセ GPS はどうか)。総合的な探究の時間と教科科目横断型授業の相乗効果があるのが八幡高校の特徴である。コーディネーターの効果は絶大であり、さらに十分な教職員の配置の必要性を感じている。
- (委員) ; 具体的な目標(職業等)を考える機会を提供できるとよい、キャリア教育・進路との関連性を意識することが重要である。キャリア教育に関わる支援ができるので、是非活用してほしい。
- (委員) ; 文理という概念をなくす先駆けになるとよい。新しい教育のモデルとして、今後は、①生徒のために提供しすぎず、自発性を伸ばせる仕組みづくりをすること ②1次情報に触れる機会をつくり、本当の「やってみたい」を育てることに取り組んでほしい。
- (委員) ; 海外では、学生と一緒に、地域・保護者が話し合いに入る取り組み事例もある。社会と連携していくモデルとして取り入れられないか。地域社会と積極的に関わることで、必然的に学ぶ仕組みをつくとよい。(例：外国人と対話する機会設定→必然的に外国語を使う)
- (委員) ; 教科科目横断型授業や夢現∞プロジェクトで学びを得た生徒達は、これから大人の考え方を変えるのではないか。それだけの取組を行っていると感じている。

4. コンソーシアム運営会議議事

(1) 第2回コンソーシアム運営会議

【実施日】

令和5年7月12日(水) 16時00分～17時00分

【場 所】

本校 会議室

【次 第】

- 1 学校長挨拶
- 2 本日の出席者の紹介
- 3 第2学年生徒1学期間の学校生活について
- 4 総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」年間計画について
- 5 2023年度「社会課題探究と解決に必要な力」調査について
- 6 高校魅力化評価システムについて
- 7 本日の「夢現∞プロジェクト」に係る指導・助言
- 8 その他

【参加者(敬称略)】

[コンソーシアム構成員]

西田 将浩(一般社団法人OCES)；永末 康介(北九州市立大学)；阿武 勲(社会起業大学九州校)；松永 康志(シャボン玉石けん株式会社)；大田 純子(公益財団法人環境戦略研究機関)；村岡 由利江(日本国際連合協会福岡県本部)

[会議出席者]

神谷 輝弘(校長)；山本 博文(参事兼事務長)；新澤 和幸(教頭)；平田 鷹司(主幹教諭)；廣濱 一郎(指導教諭)；鳥井 敦子(教諭)；松永 一平(教諭)；大塚 悠衣(教諭)；應地 広久(講師)；渡会 輝空(講師)；熊丸 修二(教諭)；井手 素子(教諭)；川津 佐代子(教諭)；三浦 大地(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】

○2023年度「社会課題探究と解決に必要な力」調査について

(アンケートは一般社団法人OCESが作成しており、生徒の探究意欲や、探究活動において必要な力を測るために本校にて調査協力している。)

(学校)；調査データはどのように活用されるのか。

(OCES)；八幡高校以外で活用することはない。

(委員)；アンケート項目に回答者氏名を入れる必要はあるか。アンケートの実施目的を明記した方がよい。

(OCES)；関係機関と相談し、対応する。

(学校)；学校としては、適切な方法で情報収集に協力する意向である。

○本日の「夢現∞プロジェクト」に係る指導・助言

(委員)；生徒たちの中で、ポスター等をつくるのが目的になっていると感じる。生徒には行動を起こさせ、沢山失敗をさせたほうがよい。

(委員)；課題の原因追究が浅く、仮説検証が非常に弱いと感じる。生徒は一時的に出た答えから、身近なツール(ポスター製作)や企業に頼る部分が多くなってしまっている。これらに対しては、ブレインストーミングが効果的。また、夢現∞プロジェクトの探究活

- 動では、複数のSDGsゴールがつながりあっていることもあるので、1つの結果(ゴール番号)に集約する必要はない。
- (委員) ; 失敗を恐れず取り組んでほしいと思う。解決策を1つに絞らず、複数の選択肢をもつようにするとよい。同窓会を活用し、外部とのつながりを広げてはどうか。
- (委員) ; 文理融合の視点をフレームワークに取り入れてはどうか。本日の見学会では、文系的な視点が多かったので、科学的・数学的な視点をもつことができるようになると、活動がより深まる。また、プロトタイプを作製については、全員で1つのものを作り上げるのではなく、1人1つずつ作ってみるとアイデアが沢山出てよい。
- (委員) ; 教員側から生徒に対し、文理融合的な視点を与えるような指導・助言はあるか。
- (学校) ; (探究指導にあたり)教員側も、生徒たちが前年度までに学んだことを、教科に関わらず把握しておく必要があると考える。
- (委員) ; 様々な教科の視点を意識的に含めることができるようなきっかけを、教員側から与えるとよい。サイコロを振って出た目の教科と取り組む課題を結びつけるような、ゲーム感覚で取り入れる方法等。
- (委員) ; 研究計画書に、取り組む課題と関連する教科を記入する項目を入れてみてはどうか。
- (学校) ; (文理融合の考え方について、)夢現∞プロジェクトと教科科目横断型授業との往還をすることで自走力を高めさせ、自分で気づかせたい。頂戴したご意見は、夢現∞プロジェクトの今後の課題として継続して検討し適用していきたい。
- (委員) ; アンケート内容が一般的だと感じた。高校生ならではの視点が出てくるのが理想的。現場の話聞く際に、1つの場所に絞るのではなく、複数の相手をリストアップし、複数調査することを考える必要がある。リーダーの生徒に引っ張られている印象が強いので、班員全員でブレインストーミングするなど、工夫があるとよいと感じる。
- (委員) ; 協議のまとめは以下の通り。①生徒には失敗を積み重ねる中で学びを深めさせる ②原因追究の方法論としてブレインストーミングを取り入れる ③探究活動に教科横断的視点を取り入れる ④高校生らしい取り組みを大切にする ⑤コンソーシアム・同窓会等を活用し、地域連携の活性化を図る

(2) 第3回コンソーシアム運営会議

【実施日】

令和5年11月1日(水) 15時55分～16時45分

【場 所】

本校 誠鏡会館

【次 第】

- 1 学校長挨拶
- 2 審査・運営について
- 3 「夢現∞プロジェクト」テーマ・内容について
- 4 その他

【参加者(敬称略)】

[コンソーシアム構成員]

西田 将浩(一般社団法人OCES)；横山 哲子(北九州市役所)；大山 貴稔(九州工業大学)；阿武 勲(社会起業大学九州校)；松永 康志(シャボン玉石けん株式会社)；西山 慶(大英産業株式会社)；大田 純子(公益財団法人環境戦略研究機関)；村岡 由利江(日本国際連合協会福岡県本部)

[会議出席者]

菱谷 涼太良(福岡県教育庁)；神谷 輝弘(校長)；山本 博文(参事兼事務長)；廣濱 一郎(指導教諭)；鳥井 敦子(教諭)；松永 一平(教諭)；大塚 悠衣(教諭)；渡会 輝空(講師)；熊丸 修二(教諭)；井手 素子(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】

○審査・運営について

(学校より、第2学年生徒の2学期以降の様子について紹介、及び「夢現∞プロジェクト選考会」における審査の実施方針や生徒の取り組み状況について説明)

(委員)；ルーブリックの採点表の言葉尻が違うので悩む。

(学校)；ご指摘のとおりである。次年度改善する。

(委員)；班別講評の際、同企業から複数名来場されている場合は、他の会場に分けたほうがよいのではないか。生徒は様々な立場からの意見を聞くことができる。

(学校)；次年度以降の参考とする。

○「夢現∞プロジェクト」テーマ・内容について

(委員)；なぜそのテーマを選んだのかという背景が分かりにくかった。ネットの情報が主だったので、様々な世代との交流があるとよい。プレゼンのための資料作りが目的となっていたように感じた。

(委員)；「調べる」「考える」に力点が置かれていてよかった(調査・全体の構成はよかった)。同時に、調べ方・聞き方の難しさを感じた。(例：Yes/Noで答えられる質問項目が多く、結果が想像できる)班内でブレインストーミングしたうえでアンケート等作成してはどうか。

(委員)；昨年度と比較し、全体的に残念さを感じた。プレゼン資料が画一的であった。内容に関しては、自分事としての「なぜ？」という問いが立っておらず、一般的な答えが決まっているような課題設定が多かったと感じる。高校生らしいプランニングやアイデアを創出するために、「どうなったらもっとよい社会になるか」という目線で考えることが必要。

(委員)；理想の姿が描けていないので、働きかける対象やアクションプランが曖昧になってい

る。校内だけの調査に止まる班もあり、「海外だったらどうか？」等の視点があってもよいと感じる。目的とアクションの大きさにギャップがある班に関しては、目的そのものを見直してもよいのではないか。失敗しても、改善して再度取り組むという姿勢を身につけさせたい。発表に関しては、全員が前に立って話す等、構成が類似している。スライドの見せ方・話し方についても練習を重ねる機会があるとよい。学校の教育活動周知のために、マスコミへ取材依頼をしてはどうか。

- (学校) ;取材に関して、来月開催「夢現∞プロジェクト成果発表会」では依頼をかけるようにしている。
- (委員) ;論理立てが上手くいっておらず、目的と結論が釣り合っていない班があった。探究活動の中では、校外活動での外部の方への挨拶の仕方や、プレゼンでの声の大きさ等、基本動作も学べるとよいと感じる。特に、発表に関しては、それぞれが得意な分野で関わればよいのではないか。(例：スライド作成・原稿作成・発表等)周知・PRのためにSNSの導入予定はないのか。
- (学校) ;SNS導入に関して、広報の意識を持ち、検討したい。
- (委員) ;生徒たちが、探究活動で壁に当たった際に柔軟にプランを転換していてよかった。発表タイトルには個性があったが、内容にオリジナリティが無く、ギャップを感じた。内容に関して、「課題設定」の項目を評価する際、どの班にも「当事者意識」を感じられず、最高評価がつかなかった。問題の中や調査対象に「自分」が入っていないことが一因ではないかと考える。「自分」はどこに含まれるかを考えさせるきっかけを作るとよい。また、アンケート等の調査の際には、質問項目における「意見」と「事実」の違いを意識し、「事実」を聞くように構成すると、攻めた取り組みにつながるのではないと感じる。発表に関しては、ピアラーニング(生徒同士でプレゼンし合い、互いにコメントする)が効果的なので練習に用いるとよい。全体的な印象として、生徒も慣れてきて着地点を探すように取り組んでいる。アクションプランが完結しなくても、アイデアや希望でよいので大きなものを立てさせるようにしてはどうか。場合によっては、次年度に学校全体で解決する課題としてもよいと感じる。
- (委員) ;内容に関して、パンフレットの作成等、本当に効果的とは言えない活動に着地している班が見られた。また、課題と向き合う際の視点を変えてみることも必要。(例：ゴミ問題について「捨てる場所を増やす」という視点ではなく「ゴミを出さない」という視点から考える)発表については、もっと派手に、元気よくプレゼンしてよいと感じる。探究活動時に、生徒と外部機関をつなぐバンクがあるとよいと感じる。
- (委員) ;協議のまとめは以下の通り。①「なぜそのテーマを選んだのか」という背景や動機の深掘り(課題設定) ②調査・情報収集の方法についての見直し(探究プロセス) ③アクションプランの規模感等、最終的に目指す地点の検討(結論づけ) ④プレゼン資料や発表方法等についての検討(表現) ⑤広報についての検討(SNSやHP)
- (学校) ;貴重なご意見に感謝申し上げます。探究活動において、外に意見を聞きに行こうとする姿勢が本校は高いと認識している。その際のアプローチ方法について、改善を図っていきたい。また、PDCAサイクルを回して、自分たちのアクションの効果を分析させたい。失敗させることも効果的なので、着地点が落ち着きすぎないようにさせたい。

(3) 第4回コンソーシアム運営会議

【実施日】

令和5年12月13日(水) 16時15分～17時05分

【場 所】

本校 会議室

【次 第】

- 1 学校長挨拶(校務により不在のため教頭挨拶)
- 2 審査・指導助言について
- 3 その他

【参加者(敬称略)】

[コンソーシアム構成員]

西田 将浩(一般社団法人OCES)；阿武 勲(社会起業大学九州校)；西山 慶(大英産業株式会社)；村岡 由利江(日本国際連合協会福岡県本部)

[会議出席者]

菱谷 涼太良(福岡県教育庁)；山本 博文(参事兼事務長)；新澤 和幸(教頭)；廣濱 一郎(指導教諭)；鳥井 敦子(教諭)；松永 一平(教諭)；大塚 悠衣(教諭)；渡会 輝空(講師)；野中 朱美(教諭)；熊丸 修二(教諭)；井手 素子(教諭)；川津 佐代子(教諭)；三浦 大地(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】

○審査・指導助言について

(学校より、「夢現∞プロジェクト成果発表会」における指導状況や生徒の取り組み状況、及び課題と感じている内容について説明)

(学校)；①パフォーマンスに頼らず研究内容を深めるようにと指導したことが、発表会での控えめな表現につながった可能性がある。②探究で失敗したことを示しなさいと指導したことが、パターン化した発表内容につながった可能性がある。③課題の設定について、自分事として考えることが生徒にとっては難しいと感じている。④文献調査の大切さを伝えたが、インターネットの検索で出てきたものを提示してしまう傾向になったと感じている。⑤1年次で探究スキルトレーニングをする必要あるが、教員側もノウハウをどのように習得し指導していくかが検討事項である。

(委員)；設定した課題との向き合い方では、具体的にどのように悩んでいるのか？

(学校)；今年度は、北九州市の課題を考えるとところからスタートし、その段階では、独自の課題になり良い傾向と感じた。しかし、グループ活動にすると一般的な課題へと落ち着いてしまった。SDGsのゴールに繋げる段階で一般的な解決策に流れたと考察しているが、個々の持つ具体的な課題意識を生かすにはどうすればよいかという面で課題感を感じている。

(委員)；課題の設定と自分事化、情報収集の仕方が大きな論点である。

(委員)；自分事として考える、当事者意識を持たせることが有効だと考える。例えば「誰が困っているのか」を具体的に考える。解決まで繋がられないと意味がないので、自分事として考える課題設定が必要である。

(委員)；自分事として考えるには、最近家族と話した内容等、身の回りの出来事から着想を得ることも手である。今回の成果発表会を見て、生徒たちに革新的な意見を求める必要はないのかもしれないと考えた。課題を見つけ、仮説、検証という明確なPDCAサイクルを作り上げることを重要視しても良いのかもしれない。夢現∞プロジェクトを通して、教員が生徒たちにどうなってほしいかを明確に伝えてはどうか。

- (委員) ; SDGs のゴールは、本来つながり合うものである。1つのゴールを選ぶということに限界があるのではないか。
- (学校) ; たしかに、ゴールを1つに絞ることについては検討課題であると感じている。夢現∞プロジェクトは「社会の穴を埋める活動」だと指導してきた。完全に埋めることはできないが、それに気づき、見つめなおすことが大切であり、そのためのツールとしてSDGs ゴールを活用してきた。
- (委員) ; これまでは新学科開設を含め、SDGs は学校広報にも一役買ってきたが、今後は必ずしもSDGs に結びつける必要はないとも感じる。SDGs にとらわれず、サステナブルな社会をつくるという方向に広げてはどうか。
- (委員) ; 探究の内容(成果)とプロセスはどちらを重視するか。
- (学校) ; 今後の人生で取り組むべき課題を見つけるきっかけになればよいと考える。革新的な課題解決の方法を見つける必要はなく、1年間、挑戦し続けた(PDCAのプロセスを回した)ことに意義があったと考える。
- (委員) ; 生徒の進路指導に探究活動は関係するか。
- (学校) ; 面接指導等において、学校生活で身についた力を見直す中で、探究活動で得たスキルを挙げる生徒は多い。例：文献調査のプロセス/外部との交渉の仕方/上手いかなかった経験の反省
- (学校) ; 探究活動の中で得た力が結果的に進路を切り拓く能力につながっている。今後の計画としてSDGs に絡めるかどうかは1学年にもフィードバックをしたい。
- (学校) ; 現1学年の今後の取り組みでは、今回の2学年の発表を振り返らせて、次年度の活動の視点を持たせたいと考えている。SDGs に結果を結びつけるかは検討中である。先日は、居住地区が近い生徒同士でグループ活動を行った。身近なものから課題意識を持つことで、次年度のグループ分けにつなげたいと考えている。
- (委員) ; 探究活動の指導の中で、教員側の気づきはあるか？
- (学校) ; 担当するグループによっては専門性のある指導内容ではないため、自身も勉強しながら取り組むこととなる。生徒たちはインターネットでの検索上位ヒットのものを参考とする傾向にあるため、調べるほどに一般的で形の丸いものに収まっている印象である。先行研究をどう生かすのか等、指導の余地はまだあると感じている。
- (学校) ; 3グループを担当したが、どの班も、調査段階において外に出て情報収集するというアプローチ方法を取ったことで着地点が似通ったものになったと感じている。
- (委員) ; 文理・クラス混合でのグループ編成のためか、生徒同士の関係性が浅い中で、尖った意見を出すのが難しいという部分もあるのではないか。グループ編成方法も見直してはどうか。
- (委員) ; 将来の社会の担い手は自分なのだという視点を持たせることが必要。「なぜ」を繰り返し考えさせるとともに、自由な切り口や気づきを与えることも重要である。
- (委員) ; 地域の課題という観点から始まったからか、課題設定がゴミ問題等に偏り、視野が狭くなっていたことが気になった。大人は気づかないような、目の前にある課題に気づくことができると良い。
- (委員) ; この活動を通した理想の生徒像が、教員間で共通認識としてあるべきである。また、SDGs をいつまでテーマとするのか、時代の動きに合わせて変容していくべきではないか。
- (委員) ; 生徒が変容した部分を褒め、見取ることが大切である。また、生徒同士が和やかな雰囲気話合い、言葉でアウトプットしながら活動を振り返る機会があると良い。
- (学校) ; 探究活動における課題、生徒像の共通認識について、学年を中心に校内で情報共有を図りたいと思う。

5. 教科科目横断型授業

(1) 概要

複数の教科科目を融合することで初めて見えてくる物事や事象の諸相を分析することで、学問と社会との繋がりや、生きる上での学問の意義を感得させ、自ら主体的に学問に向き合っていく姿勢を育成し、実践につなげる。

なお、教科等横断型授業については、平成 29 年度から 6 年間にわたって実施し、さらに、令和元年度からの 5 年間は全教員で取り組んでおり、多種多様な教科科目の組合せでバリエーションに富む内容を行ってきた豊富な実績がある。この取組はベネッセの「VIEW21」やリクルートの「キャリアガイダンス」でも紹介されている。

(2) 取組内容

全学年にわたり、学校設定教科「知の統合」（各学年 1 単位、合計 3 単位）を開設し、教科等横断型授業を実施する。

これまでも教科等横断型授業を実践してきており、主体的対話的で深い学びに深化させ、体系的に整理するために研究開発を行う。

(例)

- ・学習の目標 … 現代医療の在り方を探究する契機とする
- ・学習の内容 … 多角的アプローチから日本人特有の死生観、生と死の科学性・社会性を分析し、現代医療の展望と限界を考察する
- ・学習の方法 … 生物、公民、英語の教員が同教室同時間で授業を実施
- ・テーマ … 「臓器移植」
- ・生物 … 拒絶反応を抑える免疫抑制剤の使用を学習の教材とした免疫の学習
- ・公民 … 「臓器移植法」の成立過程や改正点、他国との相違、法律的な死としての脳死、デカルトから始まる心身二元論などの観点から学習
- ・英語 … 日本人ほどに脳死に違和感を覚えない西欧の文化風土や死生観、死に関する語彙の相違などの観点から学習

(3) 一般公開

・日時

令和 5 年 1 月 10 日（金） 12 時 20 分～15 時 10 分

・目的

新学科の特色の一つである教科科目横断型授業の取組の成果を、通学域にある中学校教員及び普通科改革支援事業指定校に周知する。

・参加人数

31 名（普通科改革支援事業指定校教員、北九州市内の中学校教員、福岡県立高校教員、福岡県教育委員会、大学教員、キャリア支援機構職員、地域環境戦略研究機関職員）

・授業動画の公開

教科科目横断型授業の一般公開事業で実際に行われた授業を、ビデオカメラで記録し、動画配信サイトにアップロードした。動画は、URL を知っている特定の人のみが見ることができる限定公開にした。URL は福岡県立高校へ周知され、教科科目横断型授業の様子を各県立学校の教員が見られる状態にすることができた。

(4) 令和5年度実施報告例

実施教科	学年	テーマ
生物・英語	3年	2008年ノーベル化学賞を受賞したGFPの功績 ～光らせることで何が可能になったのかを理解する～
英語・保健	3年	How Can You Achieve Your Future Goals?
地理・化学	2年	「水」
生物・数学	3年	科学と対数～対数処理されたグラフの価値を実感し、生存 曲線の理解をふかめる～
英語・家庭科	2年	Unit3 How do we choose what we eat?
物理・生物	3年	「光と色の関係」
英語・国語	1年	日本語 漢文 英語の比較
物理・英語	3年	「天体と神話」 「宇宙探査からわかる地球外生命存在の可能性」
国語・体育	3年	「体育理論の知識から読み解く社会課題」
体育・公共	1年	スポーツが経済に及ぼす効果
英語・歴史	1年	A Journey to Peace
化学・地理	2年	気候変動
数学・物理	2年	「微分法と積分法」
地理・化学	3年	「土」
保健・英語	1年	喫煙・飲酒のパッケージ等の海外との比較

〈卒業生の感想〉

- ・普段習っていることについて、別の視点から考えることはとても楽しく、有意義な時間になったと思う。
- ・学問のつながりを感じることができる。記憶に残りやすい。
- ・授業で使う知識が現実の問題にも繋がっていく感覚がした。
- ・科目内の知識と他の科目の知識を結びつける力が求められていると思えた。

(5) 教科科目横断型授業の実際の例

① 地理×化学

主たる教科科目	地理歴史科(地理B)	担当者	川津 佐代子
テーマ	「土」		
横断する教科等	理科(化学・地学)大野 辰晃		
実施学級・日時	3年2組 39名 令和5年11月10日(金) 5時限		
内容	農業や気候との関わりが深い「土」について、地質年代や構成元素まで分解して考える。同じ名称の土でもその性質は違っており、その性質の違いが農作物生産や食糧問題の解決を困難にしている事実気付かせ、今後予測される食糧危機の解決策を模索させる。		

	学習内容・活動
導入(5分)	「土」とは何か。定義・構成物(大野教諭)
講義1(10分) 地理歴史科(地理B)	地理Bにおける土の取り扱いとインドネシアとコンゴ民主の対比について(川津教諭)
講義2(20分) 理科(化学・地学)	同じ名称の土壌でも、地質年代・構成元素が違うことについて(大野教諭)
講義3(10分) 地理歴史科(地理B)	食糧問題の解決策について(川津教諭)
まとめ(5分)	人口爆発と食糧増産の関係について(川津教諭・大野教諭)

〈授業の様子〉



② 数学×物理

主たる教科科目	数学科(理数数学Ⅱ)	担当者	横山 俊道
テーマ	「微分法と積分法」		
横断する教科等	理科(理数物理)小林 越親		
実施学級・日時	2年1組 36名 令和5年11月10日(金) 5時限		
内容	微分積分を用いた物理学の考察 等加速度運動について 変位、速度、加速度について		

	学習内容・活動
導入(7分)	本日の学習内容の説明 微分の定義、微分の記号の確認(横山教諭)
講義1(20分) 理科(物理)	テーマ「等加速度運動の確認」(小林教諭)
講義2(20分) 数学科(理数数学Ⅱ)	テーマ「変位と速度と加速度」(横山教諭)
まとめ(3分)	物理は微分積分を用いて考えると理解が深まることがある(横山教諭)

〈授業の様子〉



③ 保健×英語

主たる教科科目	保健体育科(保健)	担当者	庄島 大智
テーマ	喫煙・飲酒のパッケージ等の海外との比較		
横断する教科等	外国語科(英語) 永田 泰寛		
実施学級・日時	1年5組 39名 令和5年11月10日(金) 5時限		
内容	タバコや酒のパッケージに書かれた警告表示や宣伝の仕方の違いについて多角的に考察し、飲酒が及ぼす健康への影響についての理解を深める。		

学習内容・活動	
導入(5分)	飲酒について(庄島教諭)
講義1(10分) 保健体育科(保健)	テーマ「日本の飲酒に係る対策について」(庄島教諭)
講義2(20分) 外国語科(英語)	テーマ「海外の飲酒対策の英語表記を正しく理解する」(永田教諭)
講義3(10分) 保健体育科(保健)	テーマ「海外の飲酒に係る対策について」(庄島教諭)
まとめ(5分)	レポート作成(庄島教諭)

〈授業の様子〉



6. 総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」

(1) 概要

SDGs の実現や Society5.0 の到来に伴って生じる課題に着目し、将来の国際社会及び日本社会における課題の発見・解決に資する知識、技能の習得と、習得した知識、技能の活用に関わる思考力、判断力、表現力を育成する。

また、自己の在り方と社会との繋がりを考えながら、社会の持続可能な発展に関わり、豊かな人生を切り拓くための学びに向う力、人間性の涵養を目指す。

なお、この取組については令和元年度から5年間にわたって継続して実施しており、令和2年度には、北九州市主催の高校生SDGs選手権大会において、プレゼンテーション部門でSDGs大賞、ポスター発表部門で優秀賞及び特別賞パートナーシップ賞を受賞、令和5年度には2022北九州SDGs未来都市アワードで市民部門のSDGs大賞を受賞する実績を残している。

(2) 取組内容

第1学年では、探究活動が本格的に始動する前の準備段階として、基礎づくりを実施する。大学や企業の講師によるSDGsの理念や思考方法に関する講演会の開催、SDGs各ゴールについての調べ学習、第2学年による研究発表会への参加、探究活動に向けたスキルトレーニングを行う。

第2学年では、「地域や人々の抱える課題を解決するために、私たちにできること」について、主体的・協働的に探究活動を行う。6～9名のグループで、社会の実態を学び解決策を検討するための調査、先行研究の分析、社会人(行政、大学、企業等職員等)との協議・座談会、グループ相互の意見交換、行動計画の実践、成果発表会、活動レポートの作成、外部コンテストへの出場等に取り組む。

第3学年では、第1学年・第2学年との交流会を実施し、「夢現∞プロジェクト」のまとめと次学年への引継ぎを行う。

以下、「夢現∞プロジェクト」のメイン学年である第2学年における令和5年度取組について、実施内容を報告する。

(3) 第2学年 令和5年度実施報告

【第1段階 4～5月】

- ・各探究班で取り組む課題を決定し、研究計画を立てる。

◆各班取組ゴールとテーマ

ゴール番号	ゴール	班	テーマ
3	すべての人に健康と福祉を	3A	NO MORE 交通事故
5	ジェンダー平等を実現しよう	5A	分け合う幸せ 家事育児
8	働きがいも経済成長も	8A	商店街でつながる喜びをもう一度！ ～黒崎商店街活性化～
		8B	地元で育てて地元で食べよう
		8C	そうだ北九州、行こう。
10	人や国の不平等をなくそう	10A	守れ！こどもの食欲と学ぶ機会！
		10B	ふわぼかの木！
		10C	すべての障がい者に寄り添う社会へ
		10D	すべての同性愛者が生きやすい世の中に
11	住み続けられるまちづくりを	11A	子ども達から地域交流を行い 子育てしやすい環境をつくろう！
		11B	ポイ捨てゴミの恐ろしさ

ゴール番号	ゴール	班	テーマ
11	住み続けられるまちづくりを	11C	NOT ばい POI !!
		11D	最低限を『祭』大限!!
		11E	公園と街づくり
		11F	わたしたちにできる詐欺対策
		11G	分別しようよ!! ～分別を推奨するために～
		11H	What is “やさしいにほんご” ?
12	つくる責任つかう責任	12A	No ロス! No 廃棄!!
13	気候変動に具体的な対策を	13A	古紙回収ってなに! ?
		13B	災害後の視覚障がい者への対応
14	海の豊かさを守ろう	14A	人と生物が共存できる水質へ
		14B	ゴミから世界救いませんか?
		14C	まさかのポイ捨て! ? ～アイデアゴミ箱で世界を救う～
15	陸の豊かさを守ろう	15A	英知の泉復活大作戦 ～身近な生物多様性～
16	平和と公正をすべての人に	16A	Without Abuse Future

【第2段階 6～10月】

- ・研究計画に沿って、調査・研究を進める。
- ・SDGs 探究ガイダンスの実施。
- ・運営指導委員及びコンソーシアム構成員との交流。
- ・課題解決に向けたアクションプランを設定・実行する。

◆SDGs 探究ガイダンス(6月・10月)

6月・10月に各1回、国公立大学や研究機関の先生に協力をいただき、中間発表・座談会を行った。対面形式・オンライン形式を併用して実施。研究内容や表現に関する指導・助言を受け、研究を深める機会となった。



〈生徒の感想〉

- ・自分たちに必要なことや改善しなければならないこと、見つめ直すべきこと等たくさんの学びがあり、実になる良い経験になりました。今後は「活性化」の定義や人を集めることのメリット・集めないことのデメリット等、根本的なことについて班で一度考えて、しっかりと土台の整った探究にしたいと思います。
- ・班員だけで考えていると見えなかった客観的な部分分かりました。「私たちは誰に向けてこのアクションプランをするのか」「ポイ捨てはゴミ箱に入れられていたら、それはもうゴミではないのか」ということを言っていたので、「ポイ捨てを減らすだけでいいのか」

「根本となって出てくるゴミはどうすれば減らせるのか」「何をすれば人に影響を与えられるのか」という新しい課題についても考えていきたいと思いました。

- ・自分たちの活動を続けていくにあたって、目的を見失わないように、活動のたびに「自分たちは何をしたいのか」「なぜこの活動をするのか」ということを言葉にしながら確認することが大切であると改めて知ることができました。今後進めていく活動にあたり、それぞれが目的を見失わないようにして活動を続けて行きたいです。

◆運営指導委員及びコンソーシアム構成員との交流(7月12日)

運営指導委員、及び大学・地域の企業・研究機関・国際機関等からなるコンソーシアムの構成員が、研究活動の様子を見学する場を設定した。生徒たちの活動に入り、交流をしていただきながら、様々な角度から研究の方向性やアクションプランに関する指導・助言をいただいた。



〈生徒の感想〉

- ・内容をもっと狭めた方が良いというアドバイスをいただいたので、1つのものをもっと深めていくように研究や活動をしていこうと思います。また、海外在住の方に、アンケートやインタビューをもらえる機会をいただいたので、より調査を広く行っていきます。
- ・自分たちはこれだけのことしか考えられていなかったで、「突拍子もない発想もしていいんだ」という考えを頂けて、とても視野が広がりました。話が面白く興味深かったです。
- ・活動の内容を大きく見直す必要があったので、全く考えていなかった視点の意見を頂けたことで、今後の活動についての見通しが立てられそうです。また、情報収集の際に「区役所に頼って」と言ってもらって、とても心強く感じました。

【第3段階 11～12月】

- ・選考会、成果発表会で研究の成果を発表する。

◆選考会(11月1日)

3会場に分かれて発表会を実施。審査は、教員、1・2学年生徒、さらに本校コンソーシアム構成員及び外部協力者の方々にご協力いただき行った。選考会上位7班は、翌月開催される成果発表会ステージ発表部門への出場権を獲得した。選考会後は、各会場にてコンソーシアム構成員及び外部協力者の方より講評を頂く場を設けた。



◆成果発表会(12月13日)

前月の選考会の結果を受けて、ステージ発表部門・ポスター発表部門に分かれて発表会を実施。審査は、教員、1・2学年生徒、さらに本校コンソーシアム構成員及び外部協力者の方々にご協力いただき行った。成果発表会後は、ステージ発表部門でプレゼンを行った班と、コンソーシアム構成員及び外部協力者の方との座談会を実施し、発表内容や表現に関する指導・助言をいただいた。

また、今年度は、コンソーシアム構成員及び外部協力者の方だけでなく、通学域にある中学校・高校教員、及び全国の「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の指定校へも案内し、現地・オンライン配信でのハイブリッド開催とした。当日の参加者数、及び内訳は以下のとおりである。

	運営指導委員	コンソーシアム	外部協力者	中学校教員	高校教員	文科省
現地	4	4	16	2	5	
オンライン				1	2	2

ステージ発表部門の上位入賞4班は、校外で開催される「SDGsアクションプランコンテスト」への出場権を獲得し、学校代表として挑戦する。また、ポスター発表部門の上位入賞班は、近隣施設にポスターを掲示していただき、地域への活動アピールにつなげた。



〈生徒の感想〉

- ・全員で役割分担をして準備を進め、発表時もそれぞれが役割を果たすことができた。自分たちのしてきたことを自分たちにしかできない形で、元気よく楽しく発表できた。
- ・課題に沿って情報を正しく集められているし、アクションプランにも統一感や一貫性があるとお褒めの言葉を頂きました。しかし、最後の伝えたいところがあまり伝わってこないのご指摘も頂きました。アクションプランをもう少し練って、最後の方にプレゼンの時間をかけられるようにしていきたいと思いました。
- ・地域を巻き込む方法をもっとしっかり考えていきたい。特に、企業を相手とした取組ができれば強みになると思った。

〈来場者アンケート結果〉

- ・全グループが、自ら課題を見つけ、自分たちなりの解決を図り、解決できない、上手くいかなかったことに対して、さらに解決を図っている過程が大変素晴らしい。八幡高校の生徒には、課題を見つける力や課題を解決する力しっかりと身に付いており、地域・県内・国内・世界で活躍できる人材が育成できていると思った。
- ・11月の選考会を経て、各班の内容がブラッシュアップされているように感じました。一方で帰結するところが大半の班で、「啓発」というアプローチにとどまっていた点ももったいないように感じました。継続化という点やKPI, KGI的な活動のゴール指標を持つことも重要なのではないかと感じました。
- ・テーマ選定もリサーチも高校生としては高いレベルだったと思います。来賓からの質問に詰まる場面もありましたが、新たな視点を知る良い機会になったのではないのでしょうか。

【第4段階 1～3月】

- ・班レポート、個人レポートに研究の成果をまとめる。
- ・新2学年生徒へ引継ぎを行う。

◆新2学年生徒への引継ぎ(3月13日)

来年度の「夢現∞プロジェクト」に向けて、1・2学年生徒間で情報伝達・共有の場を設定した。トップリーダー生徒が、「夢現∞プロジェクト」の1年間の活動について発表を行い、その後、班ごとの1・2学年生徒間交流の中で質疑応答を行った。1学年は、探究のPDCAサイクルを円滑に回すためのポイントや、協働活動において大切なことについて、2学年より助言を受けた。2学年は、1学年へ引き継ぎたい研究があれば資料を提示しながら説明し、持続的・発展的な探究活動を目指した。



〈生徒の感想〉

- ・リーダーを経験した中で、班員の姿からフレンドリーな声掛けの仕方を学ぶことができた。また、みんなで協力することができる役割分担の仕方を考え、班員の立場に立ったときにどんなお願いの仕方が一番効くか等、どう対応するかをよく考えて行動することができた。
- ・活動を通して、様々な方と関わりをもつことができた。失敗から学び、次に繋げる能力を身につけられた。
- ・副リーダーは、どこまで班員をまとめていいのかという基準が分からず、班員全員に意見を聞くことが上手くできなかつたり、話し合いをうまく進められなかつたりすることもあった。しかし、リーダーと一緒に、活動をどんなふうに進めればいいのかを話し合ったり、役割分担して班員に情報共有したりして、意見を交わしながら協力して活動することができたと思う。

(4) 使用資料及び生徒成果物一覧(次頁より掲載)

- 1 令和5年度総合的な探究の時間計画
- 2 夢現∞プロジェクト準備プリント
- 3 研究計画書(清書)
- 4 成果発表会冊子(一部抜粋)
- 5 成果発表会採点ループリック
- 6 班レポート作成上の留意点
- 7 班レポート作成見本
- 8 班レポート冊子(一部抜粋)
- 9 個人レポート作成上の留意点
- 10 個人レポート作成見本

夢現∞プロジェクト 準備プリント

1. 班員それぞれが解決したい課題

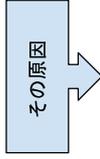
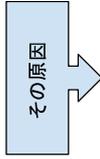
--

2. 班で考えた課題

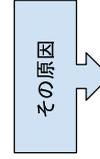
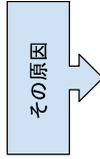
--



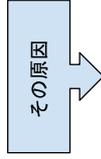
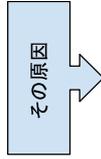
「班で考えた課題」の背景



原因 [A]	原因 [D]
--------	--------



原因 [B]	原因 [E]
--------	--------



原因 [C]	原因 [F]
--------	--------

3. 原因に対する対策

文献、インターネットやインタビュー等を通して学んだことや、自分の考えをもとに原因に対する対策を書きましょう。

原因【 】※原因CかFから選ぼう！

【原因に対するすでに行われている対策】

個人レベル (ある・ない・わからない)	学校レベル (ある・ない・わからない)	地域・市レベル (ある・ない・わからない)	企業レベル (ある・ない・わからない)	国・世界レベル (ある・ない・わからない)
------------------------	------------------------	--------------------------	------------------------	--------------------------

【原因に対してあなたの班ができる働きかけ】

個人レベル (ある・ない・わからない)	学校レベル (ある・ない・わからない)	地域・市レベル (ある・ない・わからない)	企業レベル (ある・ない・わからない)	国・世界レベル (ある・ない・わからない)
------------------------	------------------------	--------------------------	------------------------	--------------------------

原因【 】※原因CかFから選ぼう！

【原因に対するすでに行われている対策】

個人レベル (ある・ない・わからない)	学校レベル (ある・ない・わからない)	地域・市レベル (ある・ない・わからない)	企業レベル (ある・ない・わからない)	国・世界レベル (ある・ない・わからない)
------------------------	------------------------	--------------------------	------------------------	--------------------------

【原因に対してあなたの班ができる働きかけ】

個人レベル (ある・ない・わからない)	学校レベル (ある・ない・わからない)	地域・市レベル (ある・ない・わからない)	企業レベル (ある・ない・わからない)	国・世界レベル (ある・ない・わからない)
------------------------	------------------------	--------------------------	------------------------	--------------------------

4. 調査しなければわからないこと・調査しなければならないこと・実行したいこと

調査項目・実行したいこと

調査方法・実施方法

	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他()
	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他()
	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他()

※なるべくあなたに身近な背景や原因に落とし込む。
※文献、インターネットやインタビューを通して調査し、できるだけ事実に基づいた情報でバックキャストイングする。

【 】班 夢現∞プロジェクト 研究計画書 (清書)

1. SDGsゴール

(1) ゴール番号 []

(2) ターゲット番号 []

2. 班で解決に取り組む課題

3. 班で解決に取り組む課題の設定理由

4. 研究仮説

※文章や図、フローチャート等を使って表現すること。

5. 研究計画

(1) 調査計画

調査項目	調査方法	責任者	期限
①			月 日()
②			月 日()
③			月 日()
④			月 日()
⑤			月 日()
⑥			月 日()

(2) アクションプラン(行動計画)

調査項目	調査方法	責任者	期限
アクションプラン(行動計画)			
⑦			月 日()
⑧			月 日()
⑨			月 日()
⑩			月 日()
⑪			月 日()
⑫			月 日()

(3) スケジュール

月	総合的な探求の時間	調査計画・アクションプラン
4	春休み課題共有 研究計画書作成	
5	研究計画書作成 SDGs講演会	
6	研究 探究ガイダンス①(6/28)	
7	探究ガイダンス①(7/5) 研究	
8	研究	
9	研究 探究ガイダンス②(9/27)	
10	探究ガイダンス②(10/4) 選考会準備	
11	選考会リハーサル(11/1) 夢現∞プロジェクト選考会 (11/8)	
12	成果発表会リハーサル(12/6) 夢現∞プロジェクト成果発表会(12/13)	
1	レポート作成	
2	探究活動のまとめ	
3	探究活動のまとめ (1年生との交流)	

※(1)(2)の内容を(3)に反映させ、大まかなスケジュールが分かるようにすること。

6. 班員名簿

クラス・番号・名前	役割	備考(部活等)
組 番 名前	リーダー	
組 番 名前	副リーダー	
組 番 名前		

※役割：リーダー・副リーダー以外は、各班で自由に設定可。(特定の役割を決めなくてもよい)

※備考欄には、部活動など班で活動する際のスケジュール調整に必要な情報を自由に記入すること。

令和 5 年度 福岡県立八幡高等学校普通科 『夢現∞プロジェクト』 成果発表会 (一部抜粋)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



令和 5 年 12 月 13 日(水)

年 組 番 氏名

目次

1. 普通科探究活動『夢現∞プロジェクト』について
2. 本日の日程
3. 来賓一覧
4. 発表タイトル一覧
5. ポスター発表会場図
6. 各班資料(①ステージ発表班資料 ②ポスター発表班資料)

1. 普通科探究活動『夢現∞プロジェクト』について

今年度で5年目となる「夢現∞プロジェクト」は、「地域や人々の抱える課題を解決するために、私たちにできること」について、八幡高校第2学年生徒が主体的に探究し、アクションプランを考察するプロジェクトです。

班別課題とSDGs17のゴールのうち1つとを結び付け、4月から約8か月間にわたり探究活動に取り組んできました。まず、解決すべき地域や人々の課題について、文献調査やインタビュー、アンケート等をもとに学びました。その後、課題解決の方策について班内で討議し、問題提起と解決策の提案・実行をしてきました。本日の成果発表会では、これまでの取組と考察、そして今後の展望について、ステージ発表、ポスター発表の形式で各班が発表します。

2. 本日の日程

- 11:50 開会行事
- 12:00 ステージ発表(7班)
8分以内の発表+質疑応答
- 14:00 ポスター発表(18班)
10分(発表・質疑応答8分+移動2分)×5ラウンド
全体講評
- 15:00 閉会行事

商店街でつながる喜びをもう一度！ ～黒崎商店街活性化～

8 働きがいも
経済成長も



ターゲット8.9 働きがいも経済成長も

2030年までに、雇用創出、地元の文化・
製品の販促につながる持続可能な観光業を
促進するための政策を立案し実施する。

研究内容

”働きがい”について商店街で働く方々にインタビュー
⇒客との交流、店を続けること、客同士の交流が働きがい
お客さんに沢山来てもらうために**まずは知ってもらいたい**

黒崎商店街の魅力を**つたえる**広報活動を行えば、
知名度が上昇し、利用が増えるはずだ。
それにより商店街が活気を取り戻すことで、
企業の黒崎商店街への注目度が高まるはずだ。



課題

黒崎商店街の利用者の減少、
知名度の低下
空き店舗率の増加

▶ 魅力を発信して知名度**上昇**

なんでもりあげたいの？

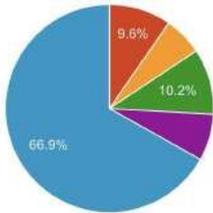
現在の空き店舗率 **約40%**

昔や他の商店街に比べて**人通り 少**

▶ **持続可能**にするには**活性化の必要 大**

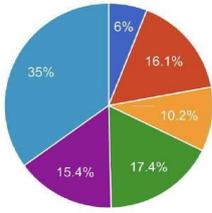
商店街利用頻度

八幡高校



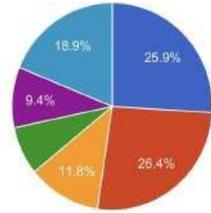
計167人

黒崎中学校



計408人

黒崎中央小



計217人

- 週に1回以上
- 一ヶ月に1回
- 三ヶ月に1回
- 半年に1回
- 一年に1回
- 利用しない

高校生になると
小倉や博多に？
近くの黒崎商店街に
も行ってほしい!!

アクションプラン

- 周辺中学校、小学校への商店街の利用頻度アンケート
- お借りした空き店舗を黒崎商店街案内所に
- 実際に行った商店街のお店、地図等を載せたパンフレット、案内所のポスター作成
- 英語版パンフレット作成
- SNSアカウントの運用
- 子ども商店街のアシスタント



今後の展望

- 空き店舗を活用した**黒崎商店街案内所**の運営
- **くまで商店街公式HP**での8A班の活動の紹介、データでのパンフレットの配布
- **くまで商店街公式Instagram**の運用
- Instagram、パンフレットでの継続的な**広報活動**



参考文献

<https://kumadegintengai.com/>
[https://hokuchu.or.jp](https://hokuchu.or.jphttps://hokuchu.or.jp) > relays >
download > libs

●課題解決のための目標

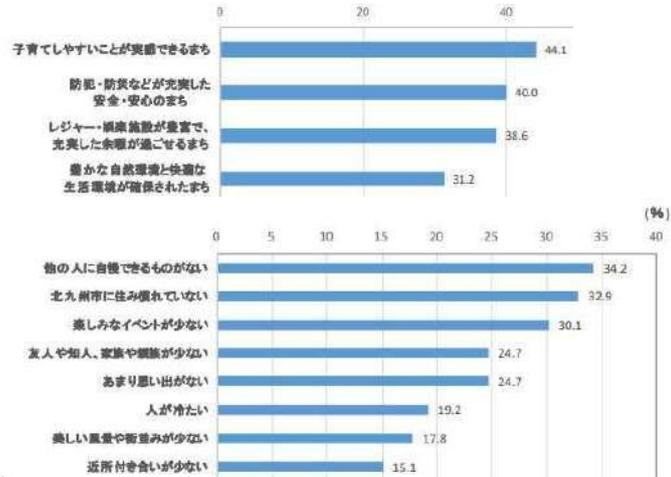
子ども達から地域交流を行い、子育てしやすい環境をつくろう！

地域の人と関わる機会、子育てする上での困り感を共有する場が少ないこと、地域交流の機会に対する興味・認知度の低下を解決すること。



●研究の動機

高校生である私達だからこそできる地域活動への参加やイベント開催によって子育てしやすく住みやすい環境を作りたい！



①都市化の進展や核家族化

②地域の繋がりが希薄化

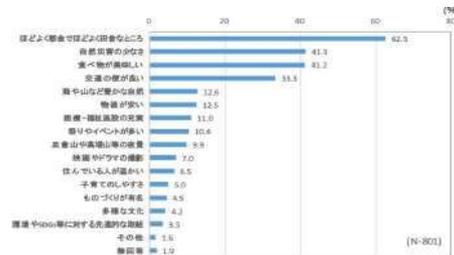
③地域や社会から孤立しがちな子育て家族の増加

④子育てに不安や負担を感じる家族が増加

⑤子供が様々な体験を通して人とふれあい、自己を形成する機会減少



コミュニケーション能力、自立心、主体性、協調性など子ども、若者の生きる力低下



北九州市の魅力はどこだと思いませんかという北九州市企画調整局のアンケートで、子育てしやすいという項目が少ないことに注目！！

北九州市子ども・子育て支援に関する市民アンケート調査（平成30年度）では力を入れてほしい子育て支援策（小学生）で「いつでも安全・安心に過ごせる公園や施設」が59.5%で最も高かった
⇒子ども向けのイベントを行おう！

●アクションプラン

- ＜イベント開催に向けての流れ＞
- 子供の館様へ交渉のお電話を行う
- ↓
- 子供の館様に伺い再度お願いをする
- ↓ **OKの連絡をいただく**
- ボランティアに参加させていただく
- ↓ **運営の仕方を学ぶ**
- イベントに向けての打ち合わせを行う
- ↓
- 「高校生とおばけ釣り」開催

1. 子どもの館でボランティア

イベントのお手伝い、アンケートの実施

- **臨機応変な対応ができた**
- **アンケートの回答が多かった**
- ◆ **積極的に行動できていなかった**



2. イベントを開催

「高校生とおばけ釣り」

イベント準備や打ち合わせ、運営

- **多くの人の参加**
- ◆ **打ち合わせが不十分**

●今後の展望

- ① **イベント内容の提案**
- ▶ イベントを行う回数を増やし地域交流の増加に繋げる
- ② **ボランティア活動の参加**
- ▶ イベント運営に参加していきたい

●長期的な見通し

- ① **道具の譲渡**
- ▶ 道具作成にかかる費用、時間を省くことでイベント開催を前向きに考えることができる
- ② **ボランティアの発信**
- ▶ イベントを作る担い手不足を解消できる
- ③ **活動の受け継ぎ**
- ▶ 私たちの学びからの改善点を踏まえてさらに良い活動ができる

参考文献

- ・まちおこしイベント開催に向けて絶対におすすめすべきPRツール7選 [keikaku04.pdf\(fukuoka.lg.jp\)](http://keikaku04.pdf(fukuoka.lg.jp))

取り組む課題: 人工物による水質汚染

課題設定のきっかけ

①近所の板櫃川で河川工事が行われた



工事前(資料1)



工事後(資料2)



写真1



写真2

②工事による川の変化から仮説を立てた



コンクリートの成分が
流れ出したのか?

川

新たなセメント

コンクリートの成分

- 水
- セメント
- 砂利
- 少量の薬剤

AE剤(界面活性剤の一種)
主成分はリン

人工中のリンが流出

植物プランクトン増加

動物プランクトン増加

生物の生活しにくい環境

界面活性剤が関与?

③界面活性剤が水質に与える影響を調べた

1. 合成洗剤を含んだ川の水
無添加洗剤を含んだ川の水
何も含まない川の水 } 用意
2. 日の当たるところに置き、観察する。

合成洗剤に含まれる界面活性剤の成分、リンが植物プランクトンを増加させるのでないか。

合成洗剤を含む水 > 無添加洗剤を含む水

大 プランクトン割合 小

④実験結果からの分析・考察



無添加洗剤

合成洗剤

無添加洗剤	変化なし	毒性無し →川の水と同じ
合成洗剤	洗剤を入れた方 →プランクトン無	毒性あり →繁殖できない

シャボン玉石けん株式会社のご担当の方や化学・生物の先生に訪ねてみたところ...

流れ出した成分 ≠ 界面活性剤

⑤流れ出した成分が何か調べた

鉄バクテリアが繁殖の際に生成したものと判明!

→土壌中の鉄を分解して繁殖。水質に害は及ぼさない。

なぜ、工事後に急増したのだろうか?
→今後の展望として、引き続き調べる。



水路や河川に見られる茶褐色の沈殿物や油膜のようなものについて(鉄バクテリア) - 枕崎市ホームページ (makurazaki.lg.jp)



福岡県立八幡高校『夢現∞プロジェクト』成果発表会 採点表(ステージ発表用) 採点入力フォームはこちら⇒

評価項目 得点	① 課題の設定	② 情報の収集・蓄積	③ 整理・分析・まとめ	④ 表現
5点	課題設定とその理由が明確であり、 <u>当事者意識をもった上で</u> 解決に向けて <u>仮説を立て</u> 、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を、 <u>目的に応じた手段を選択して</u> 収集・蓄積し、 <u>根拠のあるデータ</u> として提示している。	得られた情報を <u>正確に</u> 分析し、 <u>課題解決に有効なアクションプラン</u> を提示した上で、 <u>その考察と今後の展望について述べている</u> 。	適切な図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を <u>論理的に</u> 説明している。 <u>質問の内容を理解し、適切に受け答えしている</u> 。
4点	課題設定とその理由が明確であり、解決に向けて <u>仮説を立て</u> 、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を、 <u>目的に応じた手段を選択して</u> 収集・蓄積し、データとして提示している。	得られた情報を <u>分析し</u> 、アクションプランを提示した上で、 <u>その考察と今後の展望について述べている</u> 。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を <u>論理的に</u> 説明している。 <u>質問の内容を理解し、受け答えしている</u> 。
3点	課題設定が明確であり、解決に向けて <u>仮説を立て</u> 、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を収集・蓄積し、データとして提示している。	得られた情報を <u>分析し</u> 、アクションプランを提示している。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を説明している。質問に対して <u>受け答えしている</u> 。
2点	課題設定が明確であり、解決に向けて研究を進めている。	情報を収集・蓄積し、データとして提示している。	アクションプランを提示している。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を説明している。質問に対して受け答えしようとしている。
八高 オクタゴン	② 課題発見力 ④ 論理的思考力 ⑧ 自己肯定力	① 情報収集力 ⑧ 自己肯定力	④ 論理的思考力 ⑥ 実行力 ⑧ 自己肯定力	⑤ 連携力 ⑦ 表現・発信力 ⑧ 自己肯定力

☆お願い：すべての班の採点が終わりましたら、お手持ちのスマートフォンで本紙右上のQRコードを読み取り、各班の合計得点を入力し送信してください。※切：本日 17:00

発表順	発表班・タイトル	① 課題の設定	② 情報の収集・蓄積	③ 整理・分析・まとめ	④ 表現	合計得点
1	5A 分け合う幸せ 家事育児	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	/20
2	10D すべての同性愛者が生きやすい世の中に	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	/20
3	11D 最低限を『祭』大限！！	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	/20
4	10A 守れ！こどもの食欲と学ぶ機会！	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	/20
5	15A 英知の泉復活大作戦！ ～身近な生物多様性～	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	/20
6	12A Noロス！No廃棄！！	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	/20
7	11B ポイ捨てゴミの恐ろしさ	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	5 4 3 2	/20

『夢現∞プロジェクト班レポート』作成上の留意点【提出期限：1/17(水)】

1. 『夢現∞プロジェクト班レポート』作成の目的

○探究活動の実績をレポート形式で残す

▶自分たちの実績を形として残し、校内外に公表する。また、後輩に対しての先行研究の見本となる。

○社会課題に対する自分たちの考えを分かりやすくまとめるトレーニングを行う

▶大学入学後のレポート作成を視野に入れ、分かりやすく説得力のある書き方について知り、考え、文書作成を行う。

2. 『夢現∞プロジェクト班レポート』作成のポイント

○調べたことについてまとめると同時に、それらに対するの考察を加える

▶調査・研究内容や結果について列挙するのみでは不十分である。自分たちがどういう課題意識を持って探究活動に取り組んだか、またその結果を受けて今後残された課題についてどのように考えるか、をレポートに含めること。

○課題やその解決につながる情報をまとめる

▶集めた情報は、レポートの最後に参考文献としてまとめること。

3. 『夢現∞プロジェクト班レポート』の構成

▶文体は「～である」調で統一する。 ▶レポートの章立ては統一する。

研究テーマ	成果発表会で使用した研究テーマ(発表タイトル)を記入する。
1. はじめに	現状に対する課題意識と、この研究テーマを選ぶに至った経緯について記述する。 「どのような課題に」「なぜ取り組むのか」等を書き、読者を本論に誘導する。
2. 研究方法	課題の現状について学び、その解決に向けての方策を探るために行った調査・研究等を記述する。 <書き方例> (1) 文献調査:「平成 28 年度食料農業農村白書」(農林水産省)で…に関する調査を行う。 (2) アンケート調査:○の…に対する意識を調査するため、□を対象にアンケートを実施する。 (3) インタビュー調査:…について調査をするため、○へインタビューを実施する。 など
3. 結果・考察	① 3. で挙げた調査・研究等の結果を記述する。 作成した発表資料や、調査内容のまとめを参照するとよい。図・グラフなどを挿入してもよい。 <書き方例> 「『平成 28 年度○○白書』(農林水産省)によれば、農業従事者は図1のように減少している。」 「アンケート調査の結果…ということがわかった。」「インタビューの結果…ということがわかった。」 「この問題に対して○○市では…のような取組をしている。」 ② ①の結果をどう捉え、どのような解決策(アクションプラン)を導き出したのかを記述する。 ⇒なぜその解決策(アクションプラン)が有効だと考えるのか、根拠を示し論理的に述べる。 <書き方例> 「以上のことから、…ということがわかる。よって、私たちは…と考え、…という解決策を提案する。」 ③ 解決策(アクションプラン)実行後の結果(成果)について記述する。
4. 今後の課題	調査・研究および提案・実行した解決策(アクションプラン)について、残された課題を記述する。 次年度の研究者が追研究をする際に参考となる事項にふれるとよい。 <書き方例>「…するためには、さらに…する必要がある。」 「今回の研究では…することができなかった。今後は…を行っていきたい。」
5. 感想	探究活動を通して、どのような知識を身につけ、どのような力を伸ばすことができたかを記述する。 困難を克服した経験など、具体的なエピソードを交えて記述するとよい。
6. 新2年生に 引き継ぎたい研究	新2年生に引き継いでほしい調査・研究やアクションプランがある場合はここに記述する。 (特にない場合は記入不要)
参考文献	調査・研究の際に使用した文献やウェブサイト等のリストを作成する。 ※書籍・論文等の場合⇒①著者名・媒体名 ②タイトル ③発行年(西暦) ※ウェブ上の公開データの場合⇒①著者名・媒体名 ②タイトル ③発行年(西暦) ④URL

(一行空ける)

研究テーマ (←14pt.・太字・センタリング)

(一行空ける)

〇〇班 〇〇〇〇・△△△△・□□□□… (班員全員の氏名を入力) (←11pt.・右寄せ)

(一行空ける)

1 はじめに (←12pt.・太字)

※Google ドキュメントを使用して文書を作成する。 Google Classroom → ドキュメント → 空白

※A4用紙2枚程度にまとめる。

※書式設定は「空白」の初期設定値を利用する。(フォント: Arial/フォントサイズ: 11pt./余白: 上下左右 2.54)

※タイトル・サブタイトル等フォントサイズ指定箇所以外の本文フォントサイズは 11 (初期設定値) で入力する。

※句読点は「、」「。」で統一する。

※文章作成の基本ルールは、原稿用紙の書き方と同じ。

※段落わけをする。段落が変わるときは1マス下げる。

2 研究方法

3 結果・考察

4 今後の課題

5 感想

6 新2年生に引き継ぎたい研究

※この項目については、引き継いでほしい調査・研究やアクションプランがある場合のみ記入する。

<参考文献> (←11pt.・太字)

※参考文献のフォントサイズは9pt.で入力する。

令和 5 年度 福岡県立八幡高等学校普通科 『夢現∞プロジェクト』 第 77 期 班レポート (一部抜粋)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



令和 5 年 3 月 13 日 発行

分け合う幸せ 家事育児

福岡県立八幡高等学校 5A班

1 はじめに

私達5A班は、日本では男性の育児休暇取得率が増加傾向にあるものの、女性と比べて低いことを課題として設定した。この課題の設定理由として、私たちが家庭を持ち、家事や育児を行うことが身近になったときに、育児休暇で男性と女性によって取り組む量に差が出てしまうことに違和感を感じたから、というものが挙げられる。「男性は仕事、女性は家事や育児」といったイメージが定着しており、それが男性が育児休暇を取りづらい雰囲気を作り出し、男性の育児休暇取得率が低い原因であるという仮説を立て、研究を始めた。

2 研究方法

大きく分けて3つの方法で研究を進めた。

1つ目に、インターネットによる男性の育休取得に関する実態の調査をした。

2つ目に、日本在住の方や海外出身の方、海外に在住している日本人の方へ、グーグルフォームを用いて育児休暇に関するアンケート調査を行った。

3つ目に、2つ目に行ったアンケート項目についてより詳しくインタビューをした。このインタビューでは、デンマークに住んでいる加藤さんと、スペインに住んでいる松崎さんに、zoomで協力していただいた。

3 結果・考察

はじめに、アジア・アフリカ・南北アメリカ・オセアニア・ヨーロッパ出身の方、または在住している日本人83名（JICAに所属する方々、一般社団法人進路指導・キャリア教育支援機構OCES代表理事 西田将浩様からご紹介いただいた方々）を対象に、育休についてのアンケートを取った。その結果、「父親、母親の育休期間は十分か？」という質問に対して、母親の育休期間は不十分であると答えた人は33.7%、十分だと答えた人は32.5%、父親の育休期間は不十分であると答えた人は44.6%、十分だと答えた人は21.6%だった（表①参照）。この結果から、母親よりも父親の育休期間に対して不十分であると感じている人が多いだけでなく、十分と答えた人と不十分と答えた人の差が男女間で大きいことが分かる。

また、実際に育休を取った方に対しての「育休期間が十分であったか？」という質問に、十分であったと答えた人の割合は、ヨーロッパで87.5%、アジアで66.7%、オセアニアで55.6%、南北アメリカで50%、アフリカは0%であった（表②参照）。このことから、ヨーロッパでは育休に対しての取り組みや制度が十分に進んでいると考え、ヨーロッパに重点をおいて調査し、それを日本の育休の改善に繋がられるのではないかと考えた。

【表①】

【アンケート】 父親・母親それぞれの育休期間は十分だと思うか？			
対象83名	十分	不十分	未回答
母親の育休期間	32.5%	33.7%	33.7%
父親の育休期間	21.6%	44.6%	

ご協力： JICAに所属する方々、一般社団法人進路指導・キャリア教育支援機構 (OCES) 代表理事 西田将浩様からご紹介いただいた方々

【表②】

【地域別】育休を取得した人で育休期間は十分だと答えた方の割合(未回答を除く)		
地域名	人数/総数	割合(%)
ヨーロッパ	7/8	87.5
アジア	8/12	66.7
オセアニア	5/9	55.6
南北アメリカ	1/2	50.0
アフリカ	0/1	0.0

次に、アンケートに答えていただいた方の中から、より詳しい内容についてzoomを使って、インタビュー調査を行った。インタビュー調査の結果、「育休取得は権利だし、必要だからとって当たり前」「家事や育児は夫婦で分担しており、周りはそれが普通だった」等、積極的にパートナーの方と家事育児の分担をされていることが分かった。また、好奇心から家事を行っており、ヨーロッパではそのような考えをもつ方が多いことが分かった。デンマークの育休取得率は80%と高く、育休期間も「パパ・クォータ制」という制度によって更なる効果が期待されており、日本と比較してみても、育休取得率は高く、取得期間も長いことが分かった。

そして私達は、調査の結果を標語にし、ポスターとして研究成果を啓発することに決めた。標語を選んだ理由は、その親しみやすさにある。日本人なら誰もが一度は目にし、また、制作した人も多い標語であれば、子どもから大人まで多くの世代の方々に啓発できるのではないかと考えたからだ。また、ポスターのデザインにもこだわって制作した。ターゲットを家族、学生、両親、子育てに関わる人に分け、それぞれが今できることを標語にすることで、様々なタイプの方に問題解決への意識をもってもらえるようにした。

家族に対しては「休みの日 家族で一緒に家事をしよう 子どもの将来考えて」という標語を考え、将来、子どもが家庭をもったときに困らないように、家事の練習をしておくことの大切さを呼びかけた。現代の子どもは、休みの日でさえも家事の手伝いをする傾向が低く、特に男の子は自分が将来家事をする姿を思い描きづらいため、手伝いの重要性を理解していないと思った。そこで、この標語を読んでもらうことで、家事への意識を高めてもらおうと考えた。

また、学生に対しては「Time is limited 一人暮らしに備えよう」という標語を考え、今後一人暮らしを考える学生のために、面倒でも生きるために必要な家事を、今のうちにできるようにしておくことの大切さを訴えた。

そして、子どもをもつ親に対しては「苦も幸も 二人で分け合う家事育児」という標語を考え、女性に傾きやすい家事育児の負担を減らし、幸せを分け合うためにも家事育児を分担する大切さを表した。

4 今後の課題

今回の研究では、主に育休を取る側の目線に立ってアクションプランを計画・実行したため、育休を制定する政府や、企業側の立場に立った活動があまり行えなかった。そのため、当初に計画していた【企業へのプレゼン】【出前講座】のような活動を通して、育休を制定する側の意識の改革を行う必要があると感じた。

また、育休制度を制定する側の目線に立って活動するにあたっては、今回インタビューに答えていただいた方以外の国の方にもインタビューを行い、さらに他国の育休制度についての理解を深めていくことが必要であると考えた。

さらに、ポスターを貼ったことによって、どんな効果があったかを知ることができていないので、子どもや保護者がポスターを見てどんな反応をしていたかを調査することが必要だと感じた。

5 感想

今回の探究活動では、はじめは「男女差別によって生まれる経済格差について」を課題としていたが、探究ガイダンスで「課題設定が広すぎる」との指摘を受けて、「男性の育児休暇と家事育児」へ変更したため、活動にあてる期間も少なくなり大変だった。海外在住の人へのインタビューを通して、長期間の育児休暇や家事をするのを義務とするのではなく、権利として楽しんで行っていると知り、社会の意識の違いが、ジェンダー問題や少子化問題にも発展する重要な問題だと思った。また、男性が育児休暇を取得し家事育児を行うためには、日本に根付いている男女間の意識や、社会の体制の変化が必要だと学んだ。

この活動では、日本の家事育児に対する男女間の意識の差や、育児休暇の取得等に対する取り組みが、海外に比べてかなり遅れていることに気付かされた。私達が作成した、父親と子ども達の家事育児に対する意識の変化を目的とした標語によって、母親だけでなく、誰もが家事育児をするのが当たり前で、育児休暇を取るべきであると思えるような、より良い社会の変化につながってほしいと思う。

6 新2年生に引き継ぎたい研究

新2年生には、私達ができなかった、男性が育児休暇を取りづらい雰囲気解消するための【企業へのプレゼン】や、子どもの頃から誰でも育児休暇を取っていいという考えをもってもらうため小学校への【出前授業】等を行ってほしい。

<参考文献>

- ・ 公共財団法人 日本ユニセフ協会「SDGs CLUB」
<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/>
- ・ 厚生労働省「育児休業等取得率の公表状況調査」
<https://x.gd/3WpcM>
- ・ Forbes JAPAN Web-News Forbes JAPAN編集部 男性の育休希望の理想と現実
<https://forbesjapan.com/articles/detail/63686>

ポイ捨てゴミの恐ろしさ

福岡県立八幡高等学校 11B班

1 はじめに

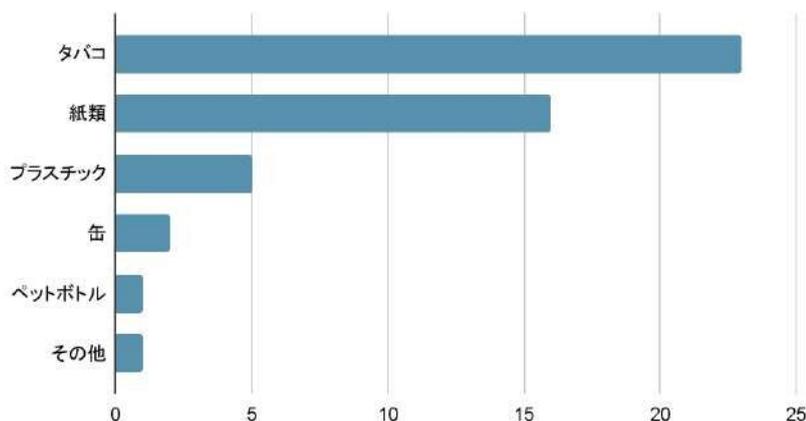
近年、ゴミ処理の方法が問題になっている。プラスチックによる海洋汚染により、海の生き物は死に、社会にはゴミが溢れて街を歩けばポイ捨てされたゴミが目につく。そこで私達はこれらのゴミを減らすことで、より環境に優しく、より住みやすい街にしていきたいと思い今回の探究活動を行った。

2 研究方法

- (1) ゴミ拾い調査：街中のポイ捨てゴミの現状について調べるため、板櫃川でのゴミ拾いを実施する。
- (2) アンケート調査：ポイ捨てゴミとタバコについての意識調査のため、八幡高校の生徒1.2年生・教員を対象にアンケートを実施する。

3 結果・考察

ゴミ拾い調査の結果は以下のとおりである。タバコが最も多くポイ捨てされていることが分かった。

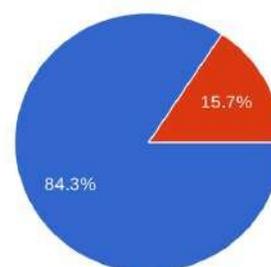


また、アンケート調査の結果は以下のとおりである。

ポイ捨ては悪いことだと思いますか？
89件の回答



ゴミのポイ捨てが多いと思いますか？
89件の回答



以上のことから、ポイ捨ては悪いことだと思っているにも関わらず、ポイ捨てをしてしまう人は年代を問わず存在することが分かる。これを受けて私達は、ポイ捨ての数を減らすため、最もポイ捨てが多かったタバコに特に視点を当て、子どもに対しては、タバコ・紙類・プラスチックなどのポイ捨てによる環境への悪影響について分かりやすく楽しく学べるクイズ形式のポスターを、大人に対してはタバコのポイ捨て防止についてポスターでの啓発を行う。

大人向けのポスターはスピナラソリエ高見店様に1ヶ月掲示する。

子供向けのポスターは子どもの館様と交渉中である。

4 今後の課題

今回は研究に時間がかかってしまい、ポスターの作成は行えたが、1番行いたかったアクションプランである「小学生に向けての出前授業」の実行に至らなかったため、そのアクションプランの効果について更に研究を重ねられなかった。アクションプランを行い、ポイ捨てゴミの数を少しでも減らしていきたい。

また、ポスターによる啓発活動だけでは課題解決には至らない可能性があるため、ポスター以上に効果があり、且つ現実的であるアクションプランを発案することも課題である。

5 感想

街中のポイ捨てゴミの量の調査では、ポイ捨てゴミが次々と簡単に見つかり、現状を知ったことで、よりポイ捨てゴミを減らすために取り組みたいと思うことができた。

しかしながら、ポイ捨てゴミを減らすために高校生の私達ができるアクションプランを考えることは難しかった。初めはゴミ箱のデザインを考え、ゴミ箱にきちんとゴミを捨ててくれる人を増やそうというアクションプランを考えた。しかし、ゴミ箱にたまったゴミの回収等、ゴミ箱そのものに関する問題点があったことに気がついた。このことから、ただ1つの目標に対する解決策を提案するだけでは、また新たな問題が生まれてしまうので、考えられるデメリットが少ない方法を選択し、計画を立てることが大切だと思った。

6 新2年生に引き継ぎたい研究

今回の研究では多くの時間を割くことができず、小学生に向けた出前授業が行えなかった。出前授業は、ポイ捨てをすることによる環境への悪影響を自分事として考えやすいワークショップ型で授業を行うことで、将来大人になったときにポイ捨てをしない人、ポイ捨てをする人に注意できる人になってもらえるように新2年生に引き継いでほしい。

<参考文献>

- ・①著者名 ホーボージュン
- ②タイトル プラスチックが海を殺す!?
- ③発行年 2020年
- ④URL <https://www.bepal.net/archives/105786>

- ・①媒体名 BBCnews JAPAN
- ②タイトル プラスチック汚染 写真でみる国際公害問題
- ③発行年 2018年
- ④URL <https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-44249670>

- ・①媒体名 A good things,Start here
- ②タイトル 海洋プラスチックゴミ対策アクションプランとは
- ③発行年 2022年
- ④URL <https://x.gd/LRF8A>

英知の泉復活大作戦～身近な生物多様性～

福岡県立八幡高等学校 15A班

1 はじめに

ニュースで、近年の絶滅危惧種の増加や生物多様性について耳にする機会が増えたことをきっかけに、少しでも生物の未来につながる活動を行いたいと思い、SDGsゴール番号15「陸の豊かさを守ろう」の課題のうちの一つである「生物多様性の保護」をテーマに活動を行った。生物多様性の危機に瀕している原因である、「生物の生息域の減少」という問題に焦点を当て、生物の暮らす場所を確保するためのシステムであるビオトープを、校内にある英知の泉で作成した。学生に1番身近な学校という場所でビオトープを作ることで、生物の生息空間を守るためだけでなく、生徒の環境に対する意識の向上という効果も期待して活動を進めた。

2 研究方法

①高校生のビオトープ認知度を調べるための校内アンケート

Classroomを使って「ビオトープに行ったことがあるか」等の質問を行う。

②響灘ビオトープへの見学

ビオトープの定義や生物多様性との関係、北九州の絶滅危惧種等について詳しく教えてもらう。自身も環境に触れてみる。

③ビオトープ作成

校内にある無法地帯となってしまった英知の泉を、生物が暮らせる環境に整える。落ち葉を取り、水を抜き、古い部分の土を取り、軽くブラッシングし、植物を植え、水を入れる。専門家の方に教えていただきながら、一番近くの川である板櫃川から植物や生き物をとって入れる。(セリ、ミゾソバ、ヨシ、ヌマエビ、ヤゴ)

before(左) after(右)



3 結果・考察

①アンケート結果

ビオトープを見たことや見に行った事がある人が約40%、そのうち意図や目的までも知っている人が約26%だと分かった。

②ビオトープ見学

実際に本格的なビオトープを見て体感することで、生物多様性にはどのような環境がいいかということや、北九州市の絶滅危惧種の実態について知ることができた。

③ビオトープ作製後の変化

ヌマエビや水虫の生存や繁殖、ビオトープ作製時には確認できていなかったヤゴの卵、キジバトの水飲み等が観察できた。また、英知の泉の前を通る際に、生徒が興味を持って泉のことは見てくれるようになった。

4 今後の課題

- ・落ち葉の定期的な掃除による除去
⇒泉上の枝を適度に伐採し日光を入れるようにし、落ち葉対策を行う。
- ・新たに入ってきた生物の把握と観察を行う
- ・雨水を利用した水の循環を作ること
⇒蒸発やエコトーンの吸収によって水位が下がってしまうのを防ぐ。
- ・ビオトープ及び活動の普及のために
⇒ワンヘルスフェスティバル2023にポスター部門で参加
広報誌「教育福岡」に記事掲載
未来をつくる高校生チャレンジ2023に参加
活動の流れをまとめたショート動画を作成、ポスターや記事にQRコードを添付

ビオトープの近づきにくさを無くし、より人々の生活に身近な存在になってほしい。簡単にビオトープを始める人が増えて、地域のビオトープネットワークを広げていけるような普及活動を、今後はしていきたい。

5 感想

絶滅危惧種という大きな課題から生物多様性へと視点を変え、身近な生き物を守るために自分たちにできることに軌道修正する過程はとて難しかった。英知の泉がどのような構造かも全く情報がない中で、本やインターネットでビオトープの情報を集め、さらに専門家の方の助言も頂きながら、英知の泉に合った製作手順を1から考えた。しかし、自然の力を利用するとなると到底計画通りには行かず、水質が悪化したり、原因の分からないハブニングが何度も起こってしまった。その状態から、何が悪かったのかを班員で話し合い、工夫を重ね、より良いものにするために作業を何度もやり直した。うまく行かなかったことを、次に活かすためのバネにし、粘り強く活動を行ってきたことで、何かを最後までやり遂げる能力を身につけることができた。活動を進める中で、泉内での新たな生命の繁栄や、新たに生物が泉を訪れていることが判明した際、活動をともにした仲間や専門家の方々全体で喜びを分かち合い、自然だけでなく人とのつながりも学んだ。

また、私達の活動を広めるために校外の活動にも積極的に参加した。「未来をつくる高校生チャレンジ」では、活動資金の支援と専門家の方との交流の機会を頂き、より精度の高いビオトープを作ることができた。「ワンヘルスフェスティバル2023」・「福岡県ワンヘルス国際フォーラム」のポスター部門に参加、広報誌「教育ふくおか」にも記事を掲載させて頂き、校外でもビオトープについての認知度を上げる活動を行えたと思う。

6 新2年生に引き継ぎたい研究

- ・英知の泉に生息する生物について、他に生き物が増えたか等の経過観察
- ・ビオトープの環境維持方法

<参考文献>

- ・中島淳.『自宅で湿地帯ビオトープ！生物多様性を守る水辺づくり』.大和書房.2023
- ・上赤博文.『ちょっとまってケナフ！これでいいのビオトープ？』.地人書館.2002
- ・山田辰美.『ビオトープ教育入門』.農山漁村文化協会(農文協).1999
- ・杉山恵一,赤尾整志(監修).『学校ビオトープの展開』.信山社サイテック.1999
- ・加藤尚裕,大熊光治,村川栄.『学校ビオトープQ&A』.東洋館出版社.2001

『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成上の留意点【提出期限：1/25(木)】

1. 『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成の目的

この個人レポートは、あなたが『夢現∞プロジェクト』を通じて取り組んできた社会課題への関心と、これまでの活動を通じて得た知識や経験、そして伸ばしてきた力について外部にアピールすることを目的として、あなた自身の言葉でまとめるものです。

個人レポートの様式は、九州工業大学・大分大学・関西学院大学等の総合型選抜提出書類をもとに作成しており、来年度の総合型選抜や学校推薦型選抜等におけるあなたの書類作成に活用できるようになっています。また、このレポートは、来年度の担任の先生方が調査書および推薦書を作成する際の参考書類となります。

進路希望調査において、現時点での志望校を挙げていることと思います。可能な限り志望校での学びと関連付けながら、365日後の自分自身のために、心して個人レポート作成に取り組んでください。

2. 『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成のポイント

○調べたことについてまとめると同時に、それらに対するの考察を加える

▶調査・研究内容や結果について列挙するのみでは不十分である。自分がどういう問題意識を持ってその探究活動に取り組み、行動し、結果を受けて今後の課題についてさらにどのように考えるかをレポートに含めること。

○探究活動における自身の役割とその活動内容をまとめる

▶自分が果たした役割や活動内容、そこから得た知識や力などについて、具体的なエピソードを含めて記述する。

3. 『夢現∞プロジェクト個人レポート』の構成

▶文体は「～である」調で統一する。 ▶レポートの章立ては統一する。

1. 探究活動のテーマ	成果発表会で使用した研究テーマ(発表タイトル)を記入する。
2. テーマ設定の理由 (テーマ設定に至った背景)	現状の課題意識と、この研究テーマを選ぶに至った経緯について記述する。 「どのような課題に」「なぜ取り組むのか」等を記述する。
3. 探究活動の成果に関する 概要	『夢現∞プロジェクト』での取組について、以下の項目に分けて記述する。 (1) 調査・研究 文献調査・アンケート調査・インタビュー調査など、アクションプランを設定するためにどのような調査・研究を行ったか (2) 解決策の提案・実行 どのような目的・方法でアクションプランを計画・実行したか (3) 結果・考察 アクションプランの結果(成果)とそこから導き出された考察と今後の展望
4. 探究活動における個人の 成果	探究活動の各段階におけるあなたの役割と活動内容、またそれらを通じてどのような知識を身につけ、どのような力を伸ばすことができたかについて、具体的に記述する。 (1) 調査・研究 (2) 解決策の提案・実行 (3) 結果・考察(選考会・成果発表会・レポート作成)
5. 探究活動を活かした今後の 目標や将来の夢	探究活動を活かした今後の目標や将来の夢について、現在の第一志望校での学びと関連付けて記述する。

(一行空ける)

2年〇組〇〇番 〇〇〇〇 (〇〇班) (←14pt.・太字・センタリング)

(一行空ける)

1 探究活動のテーマ (←12pt.・太字)

- ※Google ドキュメントを使用して文書を作成する。 Google Classroom → ドキュメント → 空白
- ※A 4用紙2枚程度にまとめる。
- ※書式設定は「空白」の初期設定値を利用する。(フォント: Arial/フォントサイズ: 11pt./余白: 上下左右 2.54)
- ※タイトル・サブタイトル等フォントサイズ指定箇所以外の本文フォントサイズは11(初期設定値)で入力する。
- ※句読点は「、」「。」で統一する。
- ※文章作成の基本ルールは、原稿用紙の書き方と同じ。
- ※段落わけをする。段落が変わるときは1マス下げる。

2 テーマ設定の理由

3 探究活動の成果に関する概要

- (1) 調査・研究
- (2) 解決策の提案・実行
- (3) 結果・考察

4 探究活動における個人の成果

- (1) 調査・研究
- (2) 解決策の提案・実行
- (3) 結果・考察 (選考会・成果発表会・レポート作成)

5 探究活動を活かした今後の目標や将来の夢

7. 会議議事録(事前説明会、高校 CN オンライン研修 5 回)

(1) 令和5年度高校コーディネーター全国プラットフォーム事業説明会

タイトル：本年度の事業説明

研修形態：Zoom Meeting によるオンライン研修

日時：6月27日(火) 13:30～15:00

主催者：文部科学省、一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJ リサーチ&コンサルティング

参加者：廣濱、鳥井、松永、大塚、應地、真子

～研修内容～

1. 事業全体概要について

- ・ CN が持続的・効果的に活躍できる支援、高等学校改革の自律的な展開に向けての支援が目的である。
- ・ ①コーディネーター研修・エコシステム研究会、②全国フォーラム、③PDCA サイクルの構築を柱にして3年間の事業を展開する。

2. 本年度のコーディネーター研修会について

- ・ R4 の成果(CN の職務要件・研修体系)の検証・改善と高校 CN の養成・育成が目的である。
- ・ 高等学校改革事業の指定校に所属する CN、高校教諭が対象である。
- ・ R5～6 にわたり、対面研修 6 回、オンライン研修 10 回を実施する。

3. 「エコシステム研究会」について

- ・ CN と共に「活かし・活かされる」学校内外の体制・関係性・環境システム(エコシステム)の在り方の検討が目的である。
- ・ CN の役割、職務環境の整備、養成・研修、CN 同士のネットワーク構成などをテーマに実施する。
- ・ R5～6 にわたり、オンライン会議 4 回を実施する。

4. PDCA サイクルの構築に係る各種調査概要について

- ・ R5 は①アウトカム評価(7月～8月)、②プロセス評価(11月～12月)に取り組む。
- ・ ①アウトカム評価(成果・結果の評価)では、「生徒の資質・能力」の状況、「学びの土壌(機会や雰囲気、関係者の意識等)」の状態を把握する。
- ・ ②プロセス評価では、ロジックモデルを踏まえた自己評価を実施する。またプロセス評価を踏まえて、ロジックモデルの修正・ブラッシュアップを行う。

5. 「高校魅力化評価システム」の実施について

- ・ ①学習活動(どう学んでいるか)、②学習環境(どのような環境で学んでいるか)、③生徒の能力認識、④生徒の行動実績、⑤生徒のウェルビーイングを可視化する。
- ・ 「学習環境(学びに関わる人との関係性、機会、雰囲気)」を把握できる、学校改善へ活用できる、事業検証に活用できることが特徴である。
- ・ 年2回の生徒向けアンケート、年1回の教職員・大人向けアンケートに取り組み、結果が還元される。
- ・ 学校内でアンケート項目を追加することも可能である。また生徒向け2回目の実施は任意である。

(2) 令和5年度 高校コーディネーターオンライン研修①

タイトル：「社会に開かれた教育課程と協働体制づくり」

研修形態：Zoom Meetingによるオンライン形式

日時：8月22日(火) 14:30～16:30

主催者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

講師：菅野 祐太 氏(兵庫県立大学大学院准教授・認定NPO法人カタリバディレクター)

参加者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. CNは何を目指して活動するのか

- ・CNは学校をよりよい方向に変えるために存在する変革者の1人のはずである。変革する対象が、どのような「制度」「歴史的背景」「地理的・地域的背景」の中で意思決定をしているのか知る必要がある。
→「教育基本法」「学校教育法」「学習指導要領」から「教育の目的」についてグループで討論し、自分なりの見解をもつ。

2. 社会に開かれた教育課程とは？いま必要な高校の改革について考える

- ・社会に開かれた教育課程の実現に必要な要素
 - ①これからのよりよい社会を創るよりよい学校教育のために必要なものとは？
→カリキュラムマネジメント
 - ②これからの社会を創っていく子どもたちが身につけるべき資質・能力とは？それらを明らかにするには？
→学校のビジョン(スクールポリシー)の策定
 - ③目標を達成するために、どのような社会との連携・協働を行っていくか？
→地域との連携(リソースの共有)
- ・協働のレベル→自校の位置づけと次に目指す段階の検討。
 - 第1段階：活動はほとんど起こらない。
 - 第2段階：地域が学校に入れる余地がある。
 - 第3段階：学校と地域の連携により、生徒の探究的な学びにつながっている。
 - 第4段階：社会と学校がビジョンを共有。互いに高め合う段階に。

3. 岩手県立大槌高等学校の事例紹介

- ・高校魅力化のポイント
 - ①地域と一体となった魅力あるカリキュラムの策定
 - ②外からの生徒受け入れの検討
 - ③公営塾の設立等、地域で子どもを育てる場づくり
- ・高校魅力化の骨子案検討
 - STEP1：理想の姿・ビジョンの検討 → 生徒・教師・地域全員が一緒になって考える。
 - STEP2：魅力的な活動内容の検討 → 地域と生徒が接続する機会のある探究活動。
 - STEP3：必要な協働体制の検討 → 産学官の多様な人材によるコンソーシアム構築。
 - STEP4：実現に必要な予算の検討 → 事業等への参画・地域予算の獲得。

4. CNが担うべき役割

- ・コレクティブ・インパクトを活用して、関係者全員で取り組む
 - ①相手を頼り、相互の実践を補完・補強し合う。
 - ②価値観をすり合わせ、共通の目標(ビジョン)をつくる。
 - ③共通の具体的な指標を設定し、生まれた成果を振り返る。

④お互いを深く理解し、関係の質を上げる。

→学校と地域が①～④を実現できるよう、ゆるやかに連携しながら同じ方向を目指す。

良い対話ができるよう、学校と地域の関係の質を上げることが大切である。

5. 事務連絡

・次回研修：9月8日(金) 14:30～16:30

タイトル：「総合的な探究の時間と新学習指導要領から進路へ」

研修形式：Zoom Meeting によるオンライン形式

講師：島根大学 大学教育センター准教授 中村怜詞 氏

大正大学 地域創生学部 教授 浦崎太郎 氏

(3) 令和5年度 高校コーディネーターオンライン研修②

タイトル：「総合的な探究の時間と新学習指導要領から進路へ」

研修形態：Zoom Meeting によるオンライン形式

日時：9月8日(金) 14:30～16:30

主催者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

講師：浦崎 太郎 氏(大正大学地域創生学部 教授)
中村 怜詞 氏(島根大学大学教育センター 准教授)

参加者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. 「総合的な探究の時間」とは何か？新学習指導要領を踏まえ理解する。
 - ・探究に「学究性」を織り込む重要性
→単に地域で探究活動を実践すること(例：マイプロジェクト)は「個別性・現場性・行動性」の向上にはつながるが、高校生の知識量だけでは限界がある。アカデミックな視点で先行研究を分析し、諸教科の授業で広い世界とつながる共通の概念・用語を身につけた上での探究活動によって、高校生の価値創造力は高められる。
 - ・「調べ学習」「研究」「探究」の違いは何か？
→ブレイクアウトルームにて3名で意見交換の後、全体での情報共有。
 - ①調べ学習：情報収集。調べたことをまとめ、表現する。継続性のない単発の活動。
 - ②研究：社会にとって信頼度の高い答えを出す活動。研究の手法が大切になってくる。
 - ③探究：自分の関心・好奇心に基づいて行う活動。探究の中で研究をすることもある。
 - ・「探究」を継続的なものにするためには、どのようなカリキュラムが必要か？
→決められた時間の中で「探究」を完結させることは現実的でないし、それは主体的な探究活動になっているとは言えない。生徒が自ら勝手に動き出すようなきっかけや場を作り提供することが学校・CN(・地域)の役目。
2. 「総合的な探究の時間」を「社会につなげる」とはどういうことなのか？
生徒の進路(キャリア教育)との接続について理解する。
 - ・生涯にわたって学び続ける時代的必要性
→「転職は当然」となった現代で、「2nd・3rd キャリアを想定して、大学進学や1st キャリアの形成ができる」ようにする力を高校教育でも提供する必要がある。探究能力や教科学力の向上は不可欠であり、それらは融合的なもの(自分軸と進路・社会・教科を統合する学び)であることが必須である。
 - ・大学進学や社会的自立に向けた探究の手順
 - ①自分軸を探る：地域と直に関わる、書物にふれてみて、様々な世界と出会う。
 - ②「自分の現在地や往く道」を「先人が来た道」から学ぶ：先行研究を学ぶ。
 - ③「自分が往く道」を探る：思いや構想を大人に相談しながら具体化する。
 - ④見習として動いてみる：大人や同級生の中で探究のプロセスを習得する。
 - ⑤独力で動いてみる：全てを自力で計画・実施する。
 - ・探究学習におけるCNの役割は何か？
→ブレイクアウトルームにて3名で意見交換の後、全体での情報共有。キーワードは「つながり」こと。生徒が興味を持てるものと地域の素材・人材をつないでいく。それだけでなく、学校の中の人材(先生と生徒、先生同士)をつないでいくことも役割のひとつではないか。
 - ①組織の常識を揺さぶる探究者であること
学校に寄り添いつつも、学校の在り方・前提そのものを疑う姿勢を持つ。
 - ②教師のリーダーシップを引き出す無邪気なフォロワーであること

制約や難しさが見えていない立場だからこそ、新しいアイデアに前向きになれる。

③組織の一体感を醸成するエスコートランナーであること

フロントランナーと後続のつなぎ手。進捗状況や困り感を共有し疑問を解消する。

3. 事務連絡

・次回研修：10月5日(木) 14:30～16:30

タイトル：「高校CNが知っておきたいカリキュラムマネジメント」

研修形式：Zoom Meetingによるオンライン形式

講師：大阪教育大学大学院連合教職実践研究科 教授 田村知子 氏

(4) 令和5年度 高校コーディネーターオンライン研修③

タイトル：「高校CNが知っておきたいカリキュラムマネジメント」

研修形態：Zoom Meetingによるオンライン形式

日時：10月5日(木) 14:30～16:30

主催者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

講師：田村 知子 氏(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科 教授)

参加者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. 「カリキュラムマネジメント」の全体像を理解する。
 - ・「カリキュラムマネジメント」とは
 - 「高等学校学習指導要領(平成30年3月告示)」においては、
 - ①教科横断的な組み立て
 - ②教育課程の評価・改善
 - ③人的、物的リソースの確保と改善上記の3側面を軸に、各学校の教育活動の質の向上を図っていくこととして記載されている。
 - ・「教育課程」とのちがい
 - 教育課程：「教育計画」の意味合いが強い。行政用語。
カリキュラム：「子どもが実際に学んだこと」まで含む。研究用語。
 - ・「カリキュラム」とは
 - ヨーロッパの産業革命や日本の学制の歴史から紐解く。現代の「カリキュラム」とは「子どもの学びの総体」(広義のとらえ)である。同じ教育計画、同じ授業でも、結果として子どもたちには「学ばれたカリキュラム」「隠れたカリキュラム」といった個別カリキュラムが形成される。「子どもが何を学んだか/学ばなかったか」という事実から授業やカリキュラムを評価し、改善や開発へ役立てることが「カリキュラムマネジメント＝学びのマネジメント」である。
2. 自校のカリキュラムマネジメントの実践において、良いところ・課題点を発見し、改善策を考える。
 - ・学校におけるカリキュラムマネジメントを系統的に見るための要素
 - ア：学校の教育目標の具現化
 - イ：カリキュラムのマネジメントサイクル(PDCAサイクルを絶えず回していく)
 - ウ：組織構造(人、物、財、組織と運営、時間、情報)
 - エ：学校文化(組織文化、カリキュラム文化、生徒文化、校風文化、チームワーク)
 - オ：リーダー(校長、教頭、主幹教諭、学年主任、そのほかの教員)
 - カ：家庭・地域社会等(学校間連携、企業、大学等)
 - キ：教育行政
 - ク：教育課程編成方針等の策定
 - ケ：目的と実態の省察(学校のミッション・子どもの実態)
 - ・カリキュラムマネジメントを自己診断してみる
 - ブレイクアウトルームにて3名で意見交換の後、全体での情報共有・まとめ。
「自身が所属する学校はどこに課題を抱えているのか」をまずは明確にする。自身またはチームで自校の強み・弱みを探し、テコ入れのヒントを見つけることが大切である。
 - ・カリキュラムマネジメント理論に基づいて取り組んだH高等学校の事例から
 - 田村氏が実際に関わった高等学校の課題解決過程の事例紹介の講義を受け、ブレイクアウトルームにて3名で意見交換の後、全体での情報共有・まとめ。

カリキュラムマネジメント理論を基に取り組む学校改革のポイント

①学校を様々な角度から分析・現状把握する

②次に取り組むべき方向性・取組の明確化する

③教科や学年の「壁」を越えた話し合いをする⇒トップダウン+ボトムアップ
⇒ミドルアップダウン

④ワークショップ型授業研究を実践する

・ハッティ Hattie のメタ分析の結論

→世界中の様々な教育の手立てを1つのものさしで測った際、「教師の信用性」が最も効果量大きいという結果が表れた。ここから、学校のパフォーマンスを最大化するには、「教師が生徒の目線で学習を見ること」「生徒が自分自身の教師となれるよう支援すること」が重要であると結論付けられた。これはすなわち、カリキュラムマネジメントの考え方であり、その重要性が世界的に共通認識されているとすることができる。

3. 事務連絡

・次回研修：11月21日(火) 10:00～16:30

タイトル：「社会に開かれた教育課程を実現するための場づくりと生徒伴走」

研修形式：対面形式

場 所：福島県立ふたば未来学園

講 師：福島県立ふたば未来学園高等学校教諭 林裕文 氏
学校支援統括コーディネーター 横山和毅 氏

(5) 令和5年度 高校コーディネーターオンライン研修④

タイトル：「VUCA 社会に対応し持続可能な社会を創る」

研修形態：Zoom Meeting によるオンライン形式

日 時：12月11日(月) 14:30～16:30(当日校務のため、後日オンラインにて視聴)

主 催 者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJ リサーチ&コンサルティング

講 師：佐藤 真久 氏(東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授)

参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. 時代を認識する～持続可能な社会の構築・VUCA 社会への対応～

・ これからの時代

→①人口の変化

②技術の変化

③環境の変化

④時空の変化

上記の4つの変化により、既存の枠組に基づく対応の限界が訪れ、VUCA(変動・不確実性・複雑・曖昧)の時代が到来する。自分の認識をアップデートし続けるためにも、社会がどう動いているのかを把握するアンテナと、他者とのコミュニケーションをとる力が必要不可欠である。

・ 総合的な問題解決

→日本のSDGs達成ランキングは「分断」がもたらす弊害により年々下がっている。1つ1つのゴールを別々にとらえるのではなく、すべてつながっているという視野を持つことの必要性が明らかになっている。自分の領域を大切にしつつも、それを他の領域と組み合わせながら、統合的に解決していくという視座・視点がこれからの時代を生きるうえで重要である。

・ 学びの作戦変更

→総合探究が形骸化している今日に、どのように思考を深め視座を高めていき、探究のプロセスのスパイラルアップにつなげるかを考えることが重要である。特に「探究の自律化(下記①～③の要素)」に重きを置いて考える。

①自分にとって関わりが深い課題になる(自己課題)

②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる(運用)

③得られた知見を生かして社会に参画しようとする(社会参画) 等

2. 協働の多様性、多義性(手段・目的・権利)

参加のしくみ・協働のしくみ・今求められている協働とは

→従来の「事業協働・連携(短期型)」に「戦略協働(中長期型)」「政策協働(中長期型)」が加わり、協働の考え方が多様化している。学校現場でも、地域の企業やNPOと協働することが多くなり、「異質性の協働」が増え、他者とともにプロジェクトを推進することが求められている。また、これは「共有ビジョンに向けて歩み続ける協働」でもある。他者同士が初めから合意形成する必要はなく、同じ目標を見ながら互いに歩み寄っていく(協働しながら学び合う・力を持ち寄る)形が、これからの協働の在り方につながる。

・「新たな公共の担い手」を育む参加の仕組みとは

→ループ①地域との接点のない生活

ループ②地域の発見と参加

ループ③地域でやりたい「私」の行動

ループ④持続可能な地域に向けた「私たち」の協働

ループ①～④にシフトしていく中で、協働に参加する人を増やしていく(参加していな

い人を見つけ、協働につなげる)ことがビジョナリーであるCNの役割である。デザイン思考とシステム思考の両軸を持つことが重要。

3. “複雑な問題”に向き合い思考と経験の反復を促すーWW型問題解決モデルー

※ WW型問題解決モデル・・・「1967年に発表された川喜田二郎氏のW型問題解決モデル」を発展させたもの

・4つの探究プロセス

→STEP1：魅力発見

STEP2：課題発見

STEP3：解決策提案

STEP4：解決策実行

各STEPの中に、①課題設定 ②情報収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現 が含まれる。

探究には「思考レベル(自分で考える)」と「経験レベル(他者と関わる)」があり、それを往還することが探究の高度化につながる。また、いきなりSTEP2から始まるのではなく、まずは、五感等の諸感覚を生かした観察・探検モードから始まるのが大切である(遊びから始まるイノベーション)。さらに、STEP3、STEP4において、システム思考とデザイン思考を実践しながら「地域の課題はそんなに簡単に解決しない」ことを再度課題として生徒へ突き返す指導者の技も必要になる。

4. 変化の担い手(チェンジ・エージェント)とサポート役(補完的エージェント)

・チェンジ・エージェントが獲得すべき4つの機能

→①変革促進：変革のためのエネルギーや勢いをもつ

②プロセス支援：学びのプロセスと協働のプロセスに場を提供する(ファシリテーター)

③資源連結：人、資金、情報、機会等を提供し、つなぐ

④問題解決策提示：解決法が人の要求や懸念にどう影響を及ぼすのかを認識する

4つの機能を1人で請け負うのは不可能であり、チェンジ・エージェントをサポートする補完的機能をもつ人材が必要である。

・CNにとってのサポート役(補完的エージェント機能)は誰か

→生徒、教員、行政機関の担当、図書館司書、用務員、地域おこし協力隊、企業、コンソーシアム、自治会、青年会議所、OB・OG、PTA、街づくりに興味のある人…等

5. 事務連絡

・次回研修：1月10日(水) 14:30～16:30

タイトル：「生涯学習」と社会教育側から見た「地域と学校の協働」

研修形式：Zoom Meetingによるオンライン形式

講師：文部科学省国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部 総括研究官

(併)社会教育実践研究センター社会教育調査官 志々田 まなみ 氏

(6) 令和5年度 高校コーディネーターオンライン研修⑤

タイトル：「学校と地域・社会の協働ー生涯学習社会における学びのカタチー」

研修形態：Zoom Meeting によるオンライン形式

日 時：1月10日(水) 14:30～16:30(当日校務のため、後日オンラインにて視聴)

主 催 者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

講 師：志々田 まなみ 氏(文部科学省国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部 総括研究官
社会教育実践研究センター社会教育調査官)

参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. 「生涯学習」理念から、学校と地域・社会の教育的な役割について理解する

・学習指導要領における「生涯学習」の取り上げられ方

→「生涯学習の基盤を培うという観点に立ち～」「生涯学習の基礎を培う観点から～」(平成29年告示 高等学校学習指導要領解説 総則編)より、生涯学習の基盤を作っていくのが学校教育であるという位置づけがなされている。また「生涯学習の考え方を進めていくため、時間的にも精神的にもゆとりのある教育活動が展開される中で～」(平成29年告示 高等学校学習指導要領解説 総則編)より、短期間で教育を考えるのではなく、楽しみながらのんびりと学習していくという意味が「生涯学習」には込められている。

・教育のジャンル

→①フォーマル教育(学校教育)：各公的基準が設定されており、かつ、学ぶ内容が体系化され、組織的な体制・チーム等で学ぶ機会。

②インフォーマル教育(家庭教育)：学ぶ内容が体系化されておらず、組織的な体制・チーム等で学んでいない機会。偶然の出会い(家庭内や地域の人との偶発的な交流等)による教育。機会を意図的に作ることはできない。

③ノンフォーマル教育(社会教育)：学ぶ内容が体系化され、組織的な体制・チーム等で学ぶ機会。公民館での講座、ボーイスカウト、NPOのプログラム、ボランティア養成等。教育的にねらいを確認し、共有し合って作る機会。

上記①～③はすべて「生涯教育」であり、社会として、どれも等しく大切な成長の機会である。

・教育を考えるうえで重要な2つの軸

→①「ねらい」の違い：「フォーマル教育」では、学術や国家の発展をねらいとしてなされているのに対し、「ノンフォーマル教育」では、知りたい・学びたいという思い(社会課題・生活課題)に答えていくことをねらいとしている。

②学習の進め方の違い：「フォーマル教育」が、内容・方法・時間に関する基準の厳格さや専門性を問われるのに対し、「ノンフォーマル教育」ではそれらに関する自由度が高いといえる。

①②を軸として、「ノンフォーマル教育」が、「フォーマル教育」のノウハウや知恵に刺激を受けながら、新しい教育の開発にチャレンジしていくことが、これからの社会で求められている。

2. 学校と地域・社会の『協働』の在り方について考える

・地域・社会との協働がすすんだ学校とは

→ブレイクアウトルームでグループ討論をしたのち、全体共有。捉え方は様々であるが、「多様な主体(保護者・企業・行政等)が学校運営に参画することができる仕組み(協議

体)を持った学校」が協働の進んだ学校であるといえる。地域と協働活動することを目的化するのではなく、何のために学校を運営していくのか、学校が地域の中でどんな役割を担っていくのかということから話し合い、共有していくことが、協働の在り方として重要である。

- ・「フォーマル教育」を「ノンフォーマル教育」につなげていくために必要なもの

→①学校ガバナンスの強化

②社会に開かれた教育課程

「フォーマル教育」が大切にしてきた厳格な公的基準(提供機関、修業認定、入学資格、普遍性、共通性、評価可能な能力等)について、多くの当事者とともに見直していくことが変化の激しい現代社会で必要とされ始めている。教育の内容ばかり刷新していくのではなく、教育や学校そのものの在り方を、それぞれの立場を越えて議論ができる環境やチーム(コミュニティ・スクール等)を作ることが重要である。

3. 事務連絡

- ・次回研修：2月21日(水) 13:00~17:00

タイトル：1年間を仲間と一緒に振り返り、次の一手を考える

研修形式：対面形式

場 所：文部科学省

8. 会議議事録(高校 CN 対面研修 3 回、高校 CN 全国フォーラム)

(1) 令和 5 年度 高校コーディネーター対面研修①

タイトル：「協働体制構築の基本のキ」

研修形態：対面形式

日時：7 月 13 日(木) 13:00～17:00、14 日(金) 9:00～12:00

場所：島根県民会館

主催者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング

参加者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. 高校 CN とは何か？協働とは何か？(7 月 13 日)

- ・協働体験を通して、協働するために必要なことは何か考える
→ゴールの設定、役割、人間関係・信頼関係、段取り、知識・論理的思考、コミュニケーション力、時間

- ・島根県内等 CN として活躍している方に話題提供いただき、CN のモデルに出会う

①島根県立矢上高等学校 魅力化 CN 小林 圭介 氏

仕事内容：生徒募集・探究支援・地域連携・コンソーシアム運営等

詳細：CN の役割は学校と地域をつなぐこと。探究活動用の教材づくりでは、地域の素材をそのまま教材にするようこころがけ、説明せずとも生徒が理解できるようなものを作成する。また、校内にボランティアボードや探究の掲示板を設置し、生徒自らが探究したくなる状況づくりを行っている。探究活動は、すべての教科に切り口が存在するため、全教科の内容を把握し、探究と教科の学習とがマッチするようにしている。

②京都橘中学校・高等学校 探究学習 CN 長谷川 夕起 氏

仕事内容：総合的な探究の時間のカリキュラムづくり・教材作成・外部人材接続・キャリア教育支援(大学・就職志望理由書添削等)・学校広報

詳細：学校内での人間関係・信頼関係の構築を念頭に活動している。そのためには、学校現場を知ること。1 年間の行事や考査の予定を把握し、その中で、学校で実施できそうなことを提案したり導入したりするようにしている。自身のやりたいことの軸と、教員の負担が過剰にならないような視点を併せ持つことが大切である。また、学校内の生徒たちの様子から、自身が CN としてどうあるべきかという理想像を探るようにしている。

2. 連携協働のためのコミュニケーション基礎(7 月 13 日)

- ・自己を知る、自己を伝える技術

①自己のコミュニケーションタイプ(DISC 理論)の強みと弱みを理解し、場面に応じて振る舞う

②他者と自分は「違う」ということを念頭に、自分の「あたりまえ」を自覚する

③チームメンバー、協働相手のタイプを理解し、相手の強みを引き出し、弱さに対応したコミュニケーションをこころがける

④コミュニケーションに齟齬は起きると認識し、どうやって乗り越えるかを考える

- ・他者を知る技術、聞く技術

①協働相手を探す

②相手の持っている強みやニーズを理解する

③相手に自分達の目的を理解してもらう

④ラポール(信頼関係)の育成

3. 学習者としての在り方を磨く(7月14日)

・目標設定、学習計画づくり

①目標の設定

先輩CNの話、自身が認識している役割、周囲が期待している役割、自身の価値観から、令和5年度末の姿(目標)と理想の高校CN像(ビジョン)を設定する。

②課題解決の方法

- ・「発想の転換」→相手を変えるのではなく、まずは自分から変わる
- ・「創造的学習方法」→知識偏重型学びから、自分の答えを創造する学びへ
- ・「人的ネットワークの拡大」→外部資源等を増やし課題解決の支援を集めやすくするグループワークを通して他者から課題解決のアイデアをもらい、自身の目標を達成するための学習計画を策定する。

③目標の共有

ペアワークを通して、自身の目標と理想の高校CN像を他者へ言語化し共有する。「高校CNとは何か」「高校CNのレディネス(学習者の心身の準備状態)に必要な資質能力は何か」について、令和5年度の研修を受講する前・各研修受講後・全研修受講後で記録を残し、学習ポートフォリオを完成させる。

4. 事務連絡

・次回研修：8月22日(火) 14:30~16:30

タイトル：「社会に開かれた教育課程と協働体制づくり」

研修形式：Zoom Meeting によるオンライン形式

講師：認定NPO法人カタリバ ディレクター

兵庫教育大学教育政策リーダーコース 准教授 菅野 祐太 氏

(2) 令和5年度 高校コーディネーター対面研修②

タイトル：「社会に開かれた教育課程を実現するための場づくりと生徒伴走」

研修形態：対面形式

日 時：11月21日(火) 10:00～16:30

場 所：福島県立ふたば未来学園

主 催 者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. 学校のビジョン、目指す教育を実現するための環境づくり

講師：林 裕文 先生(福島県立ふたば未来学園 企画研究開発部主任)

・ふたば未来学園について

①未来創造探究とは

「総合的な探究の時間」において、意志ある創りたい地域(社会)の未来を考え、そのために解決すべき課題の設定・解決策の実践を繰り返す授業(3年間8単位)。フェーズごとに発表会を設け、到達したい目標地点をその都度決定している。生徒自身の「好き」や「興味関心」を出発点とし、それらが地域や社会の課題とつながるような自分なりの問いを設定する。各教科学習で身につけた力と、探究の見方・考え方を往還しながら、課題解決に向けた実践を重ねていく。

②理念とカリキュラムを体現する校舎

校舎設計コンセプト：劇場的な賑わいを創出する ECC(エデュケーションコンコース)。まちなみと連続した空間を創ることで、生徒たちが地域・社会と交わる学びを誘発。実社会との協働：「ラボとカフェ」「図書館」「シアターと美術室」を地域との協創空間ととらえ、学校を中心に据えている。

・校内見学をとおして(グループワークによる気づきの共有)

全体的に視界を遮るもの(柱、背の高い棚等)や扉が少なく、校舎のどこからでも人が見えるつくりになっており、人々の交流が生まれやすい。ALS(アクティブラーニングスペース)には、ホワイトボードや可動式の机・椅子が配置され、いつでも生徒が自由に活動に取り組むことができる。また、校内各所に、様々なジャンルの本の展示や新聞記事の掲示、生徒の成果物があり、探究のアイデアや子どもたちの声が溢れている印象があった。

・自校の環境デザインについて

自校の教育目標と、それを達成するための環境デザインについて個人で検討した後、グループ内で共有。予算の観点から校舎自体を大きく変えるのは難しいが、空き教室を活用することや、廊下・ロータリー等の生徒が多く通る場所を有効利用するといったことから、生徒が自発的に学ぶ空間づくりに携われるのではないかという議論がなされた。

2. 「総合的な探究の時間」の生徒伴走をメタ認知する(授業見学及びグループワーク)

講師：横山 和毅 氏(認定NPO法人カタリバ/学校支援統括コーディネーター)

・「総合的な探究の時間」における課題認識

例：主体的な探究テーマの設定にならない

アクションに移らず、調べ学習に留まってしまう

探究サイクルが回らず深い学びに到達しない

→生徒の現状に合わせ、伴走者の介入度合いを適切に調節することがポイントである。しかしながら、現状把握の手法や介入の仕方の難しさから、課題感や負担感を感じている教員・伴走者が多い現状である。

・伴走力を磨く2つのポイント

①生徒の見立て

「見立てる」とは、生徒の様子やそれを取り巻く環境を観察し、子どもの状態を把握した上で、子どもへの関わり方を決めること。そのためには、課題と感じている事象が「どのようなコミュニケーション場面(生徒の人数・伴走者の人数によって区分け)」で発生しているかを整理し、その都度最適な対応を選択する必要がある。

②「足場かけ」となる関わり

伴走者は、生徒にとって「誰かと一緒ならば・支援があればできる」といった「発達の最接近領域(ヴィゴツキー)」への足場かけとなる関わり方をする必要がある。また、ふたば未来学園では、探究学習における伴走者の役割(ロール)は以下の5つに分けられると考えられている。

- ・メンター：寄りそう・勇気づける
- ・インストラクター(ティーチャー)：教える・型を与える
- ・ファシリテーター：引き出す・問いかける
- ・コラボレーター(ジェネレーター)：視座を上げる・背中を見せる
- ・コーディネーター：つなげる・出会わせる

生徒の「活動への意欲の高さ」「活動の進捗の速さ」を軸に状況を整理・把握し、適切な関わりをもつことが、足場かけをつくることにつながる。多様な関わり方の引き出しを自身の中につくることや、他の伴走者(教員・CN)と協働して、役割分担することも有効である。

・「総合的な探究の時間」授業見学

→全学年同時間に「総合的な探究の時間」の授業が実施される。生徒たちは、思い思いの場所で探究活動に取り組んでいる。伴走者(教員やCN)は、担当する生徒との会話の中で探究の進捗を把握し、チーム内でこまめに情報を共有しながら、以降の伴走計画を立てる。伴走者は1人ではなく、チームで組織構成されることで、適材適所で役割(ロール)発揮をすることができている。

3. 事務連絡

- ・次回研修：12月11日(月) 14:30～16:30
タイトル：「協働論と学習論」
研修形式：Zoom Meeting によるオンライン形式
講師：東京都市大学環境学部 教授 佐藤 真久 氏

(3) 令和5年度 高校コーディネーター対面研修③

タイトル：「1年間を仲間と一緒に振り返り、次の一手を考える」

研修形態：対面形式

日 時：2月21日(水) 13:00～17:00

場 所：文部科学省東館3階講堂

主 催 者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. リフレクションは何のため？(講義)

講師：中村 怜詞 氏 (島根大学 大学教育センター 准教授)

・リフレクションとは

あらゆる経験から学び、未来に活かすことを目的とした、自分の内面を客観的、批判的に振り返る行為。

・意義① 経験から学ぶ力を高める

ある出来事の結果について、多様な観点(意見、経験、感情、価値)から内省することで、自己のものの見方を理解し、多面的なものの見方ができるようになる。

・意義② 他者との対話から学ぶ力を高める

リフレクションでは、他者によるフィードバックが自己理解を深めるうえで有効である。自分との共通点だけでなく、相違点から学ぶ対話ができると、新たな視点で物事を見つめなおすことが可能になる。

・意義③ 自己変容を促す(メンタルモデル、ダブルループ)

より深い内省のためには、行動の言語化が必要である。意識的な行動だけでなく、無意識的にとった行動についても自身の言葉で説明することで、自己の在り方や変容を自覚することができる。また、内省の際には、批判的な視点を持ち、与えられた環境やルール、資源といった枠組みそのものを問い直すダブルループ学習のアプローチが有効である。

2. リフレクション体験(ワーク)

・経験のリフレクション

3人1組でのグループワーク。1年間を振り返り苦労した経験から、どのような学びを得て、法則を見出し、それを次にどう活かすかについて意見交換を行った。対話の際には、「そのとき、どのような感情であったか」「その経験の前に戻れるとしたら何を変えるか」等の問いを与え合い、様々な角度から状況を振り返りながら次の一手を検討した。

・自己理解のリフレクション

3人1組でのグループワーク。1年間のCN活動を通して最も大切だと感じたキーワードを選択し、その理由となる経験、またその時の感情を振り返る。最後に、そこから見えてくる自身の大切にしている価値観が何か、対話の中で見出す活動を行った。

3. リフレクションの習慣化による自身のアップデート

①自分の価値観、信念を理解するためのリフレクション

自分が何にワクワクできるのか、夢中になれるのか、自分の心の針が動いた瞬間を記録していく。→自分の考えや行動の軸

②自分の特性を理解するためのリフレクション

どんな条件が揃えば努力を継続できるのか、計画通りにいかなかったのはなぜか等、頑張りたい時に頑張れる環境を自分で整えるための材料を集めていく。→次の一手のカギ

(4) 令和5年度 高校コーディネーター全国フォーラム

目的：高校コーディネーターの導入が高校改革、高等学校の特色化・魅力化を推進する効果があることを広く普及・発信する。

実施形態：対面形式

日 時：2月22日(木) 13:00～17:00

場 所：文部科学省東館3階講堂

主 催 者：文部科学省、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

参 加 者：廣濱 一郎(指導教諭)、真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～フォーラム内容～

1. 講演「高等学校改革の推進について」

文部科学省初等中等教育局参事官(高等学校担当) 付

- ・新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正等について

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)及び「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ(審議まとめ)」等を踏まえて、学校教育法施行規則、高等学校設置基準、高等学校通信教育規程等の一部改正等を行った。①各高等学校の特色化・魅力化 ②普通科改革(高等学校における「普通教育を主とする学科」の弾力化)を推進している。

- ・「高等学校教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ」をうけた省令改正について

①学校教育法施行規則改正(令和6年4月1日施行) ②「高等学校等におけるメディアを利用して行う授業の実施に係る留意事項」(通知)改正関係(令和6年4月1日～)に関する概要報告。

- ・高等学校改革の推進に資する事業について

①新時代に対応した高等学校改革推進事業 ②高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール) ③各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業 に関する事業内容と現状・課題の報告。

2. 報告「全国高校CNプラットフォーム構築事業関連」

三菱UFJリサーチ&コンサルティング、
一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム

①全国高校CN調査結果 ②エコシステム研究会実施結果 ③高校CNの職務要件と資質能力検討結果 ④高校CN研修実施結果 についての状況報告。高校CN研修については、来年度も引き続き実施し、全国のCNの資質能力の向上を図る。

3. 発表「高校CNロールモデル」

高校CNとしての1年間の活動を通して生まれた自分自身の変化や学びを共有。

- ・発表者①：中山 隆之 氏(三重県立上野高等学校)

初めは不満もあったが、後半にかけて研修が楽しく思えてきた。生徒自身が答えを見出すVUCA社会と同じく、CNの仕事にもモデルがあるわけではなく、自分で見つけていくことを理解した。研修で学んだことを自校に持ち帰り、活かすことができるようになってきた反面、後任となる人材を探すことには、課題(待遇面や社会的な認知度向上)を感じている。

- ・発表者②：石本 冴 氏(愛媛県立三崎高等学校)

研修の前半はきつと感じる場面が多かった。しかし、対面研修で、互いに思いを共有したり、現場の情報をその場で交換したりすることで、充実度が上がってきた。対面研修③で、「自分の大切にしている価値」を考えたときに「成長マニア」と言われ、腑に落ちた。いまだに不安はあるが、これまでやってきたことは間違いではなかったと思え、

自信につながった。

- ・発表者③：神宮 一樹 氏（埼玉県立秩父高等学校）

市の所属で、地域おこし協力隊として活動している。着任当時は、予想していた以上に、自分の役割が不明瞭で分からず、不安な気持ちであった。そんな中での CN 研修は、互いの不安を分かち合える時間で、自分にとって必要なものだった。研修を通して、できない理由でなく、自分にできるベストは何かを考えられるようになった。また、自分の弱みだと思っていたところが、CN としては強みになりうるかもしれないという新しい見方もできるようになった。

4. 事例発表「高校 CN 活躍のために何ができるか」

フェーズ①：高校 CN の配置に向けて(予算確保、配置の検討段階)

フェーズ②：高校 CN の採用に向けて(人物像、業務内容、処遇の検討段階)

フェーズ③：高校 CN の着任に向けて(業務役割分担、チームづくり段階)

フェーズ④：高校 CN の発展に向けて(新たな価値づくり段階)

上記 4 つの段階別での事例発表が計 3 回行われた。本校は、フェーズ②で発表を行った。また、他 2 回の発表では、下記の学校の事例を聴講した。

- ・フェーズ②：北海道大樹高校の事例

初めて高校 CN を受け入れる場合は、まず、特定の業務に CN を配置することが大切である。特定の教員とチームになることに集中し、お互いの価値観や考え方を知ることが重要視する。その後、校内での CN 認知度が向上してきたら、学校の組織形態の中に CN を配置する。さらに、CN の存在価値が地域でも認知されている段階になれば、授業の範囲外でも、町と高校のつなぎ役として活動することが可能になる。小さく始めて、チューニングしながら関係性を育てていくことで、徐々に信頼関係が生まれていく。採用される CN は、ビジョンを持ち、それを行動によって示していく姿勢が大切である。

- ・フェーズ③：兵庫県立御影高等学校の事例

御影高校では「学校経験者型」「民間プロデューサー型」「伴走型」の 3 名の CN を配置している。それぞれで役割を分担し、補い合いながら業務にあたっている。学校側には、探究学習のリーダー教員を配置し、各 CN と連絡ツールを活用しながら情報を共有することで、コミュニケーション不足を解消する工夫を凝らしている。チームビルディングに関しては、提案を気軽に出し合い、「どうやったらできるか」を検討し、判断を迅速にフィードバックすることを互いに心掛けている。

9. 先進校視察

普通科改革支援事業採択校に共通する課題

普通科改革支援事業の概要 予算執行 新学科設置に向けた取り組み 運営指導委員会・コンソーシアムの実施体制 コーディネーターの役割・業務 新学科における特色・魅力ある取り組み

学校名及び訪問内容	日付	訪問者
兵庫県立兵庫高等学校 ・創造科学科概要 ・グローバル型教育 ・STEAM 教育	令和5年11月27日(月)	指導教諭 廣濱 一郎 教諭 大塚 悠衣 コーディネーター 真子 静佳
京都市立開建高等学校 ○ ・ルミノベーション科概要 ・総合的な探究の時間「協創」 ・学校設定科目「ルミノベーションⅠ」 ・授業見学・校内見学	令和5年11月28日(火)	教頭 新澤 和幸 教諭 鳥井 敦子 教諭 松永 一平
和歌山県立新宮高等学校 ○ ・新学科設置に向けての取組 ・運営指導委員会・コンソーシアムの実施体制 ・学校設定科目「くまの学彩」 ・探究学習ポスター発表参観 ・校内見学	令和5年12月19日(火)	教頭 新澤 和幸 教諭 鳥井 敦子 教諭 松永 一平

○印は普通科改革支援事業採択校

10. 会議録

日程	時間	内容	校内	校外	オンライン	視察
04/11(火)	13:15~14:05	第1回新学科推進課会議	○			
04/25(火)	13:15~14:05	第2回新学科推進課会議	○			
05/16(火)	13:15~14:05	第3回新学科推進課会議	○			
05/22(月)	13:15~14:05	第4回新学科推進課会議	○			
05/24(水)	16:15~17:15	第1回運営指導委員・ コンソーシアム合同会議	○			
05/29(月)	13:15~15:05	公開授業・研究発表会協議	○			
06/09(金)	13:00~17:00	福岡県立小倉高等学校				来校
06/13(火)	13:15~14:05	第5回新学科推進課会議	○			
06/20(火)	13:15~14:05	第6回新学科推進課会議	○			
06/27(火)	13:30~15:00	第1回CN研修会			○	
07/04(火)	13:15~14:05	第7回新学科推進課会議	○			
07/12(水)	16:00~17:00	第2回コンソーシアム運営会 議	○			
07/13(木)	13:00~17:00	令和5年度高校コーディネ ーター研修(対面①)		○		
07/14(金)	09:00~12:00	於 島根県民会館				
07/18(火)	10:40~11:30	第8回新学科推進課会議	○			
08/22(火)	14:30~16:30	令和5年度高校コーディネ ーター研修(オンライン①)			○	
08/29(火)	15:30~16:20	第9回新学科推進課会議	○			
09/05(火)	13:30~14:20	第10回新学科推進課会議	○			
09/08(金)	14:30~16:30	令和5年度高校コーディネ ーター研修(オンライン②)			○	
09/13(水)	13:00~16:15	和歌山県立新宮高等学校				来校
09/19(火)	13:15~14:05	第11回新学科推進課会議	○			
09/22(金)	10:30~17:40	普通科改革支援事業指定校 発表会 於 京都市立開建高等学校		○		
09/25(月)	14:00~15:30	鹿児島県立伊集院高等学校				来校
10/03(火)	13:15~14:05	第12回新学科推進課会議	○			
10/05(木)	14:30~16:30	令和5年度高校コーディネ ーター研修(オンライン③)			○	
10/17(火)	13:15~14:05	第13回新学科推進課会議	○			
10/31(火)	12:55~13:40	第14回新学科推進課会議	○			
11/01(水)	15:55~16:45	第3回コンソーシアム運営会 議	○			
11/07(火)	13:15~14:05	第15回新学科推進課会議	○			
11/08(水)	13:30~16:30	兵庫県立柏原高等学校				来校
11/21(火)	13:15~14:05	第16回新学科推進課会議	○			
11/21(火)	10:00~16:30	令和5年度高校コーディネ ーター研修(対面②) 於 福島県立ふたば未来学園		○		

日程	時間	内容	校内	校外	オンライン	視察
11/27(月)	13:00~15:00	兵庫県立兵庫高校				訪問
11/28(火)	09:30~12:00	京都市立開建高校				訪問
12/05(火)	13:15~14:05	第17回新学科推進課会議	○			
12/11(月)	14:30~16:30	令和5年度高校コーディネーター研修(オンライン④)			○	
12/12(火)	13:15~14:05	第18回新学科推進課会議	○			
12/13(水)	16:15~17:05	第4回コンソーシアム運営会議	○			
12/19(火)	11:00~15:30	和歌山県立新宮高等学校				訪問
01/10(水)	14:30~16:30	令和5年度高校コーディネーター研修(オンライン⑤)			○	
01/11(木)	14:30~16:00	カリキュラムマネジメントの理論と実践 講師派遣 於 福岡教育大学教職大学院		○		
01/16(火)	13:15~14:05	第19回新学科推進課会議	○			
01/30(火)	12:55~13:40	第20回新学科推進課会議	○			
01/30(火)	16:15~17:15	第2回運営指導委員会	○			
02/21(水)	13:00~17:00	令和5年度高校コーディネーター研修(対面③) 於 文部科学省		○		
02/22(木)	13:00~17:00	令和5年度高校コーディネーター全国フォーラム 於 文部科学省		○		
02/26(月)	09:30~12:00	兵庫県立篠山鳳鳴高等学校				来校
03/12(火)	13:15~14:05	第21回新学科推進課会議	○			

【福岡県立八幡高等学校】学際領域学科(令和6年度設置)

スクール・ミッション 自身の幸せな人生と、未来の幸せな社会を、しなやかに創造する心豊かな人材を育成する学校

文理分断的思考からの脱却

持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする姿勢

教科科目横断型授業

複数の教科科目を融合することで初めて見えてくる物事や事象の諸相を分析することで、学問と社会との繋がりや、生きる上での学問の意義を感得させ、自ら主体的に学問に向き合っていく姿勢を育成し、実践につなげる。



夢現∞プロジェクト

SDGsの実現やSociety5.0の到来に伴って生じる課題に着目し、将来の国際社会及び日本社会における課題の発見・解決に資する知識、技能の習得と、その活用に関わる思考力、判断力、表現力を育成し、実践につなげる。



特色ある教育活動



コーディネーター

- ① 学校と地域をつなぐ調整役
- ② 教員と生徒をサポート

運営指導委員会

- 管理機関・行政機関・教育機関で構成される
- ① 学校行事や教育活動に関する指導・助言
 - ② カリキュラム検討に関する指導・助言
 - ③ 事業全体に関する指導・助言

指導・助言

コンソーシアム

- 八幡高校・行政機関・教育研究機関・地元企業で構成される
- ① カリキュラムの検討
 - ② 評価方法に関する検討
 - ③ 事業進捗状況の確認
 - ④ 探究活動への指導・助言
 - ⑤ 生徒探究活動への参加協力



関係機関との連携・協働体制の構築

令和5年度の目標と取り組み

- | | |
|---|--|
| <p>〈目標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○新学科「文理共創科」設置の準備と関係機関との協働体制の継続 ○特色ある教育活動の体系化と外部への情報提供(公開授業等)推進 | <p>〈取り組み〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○意識調査の実施 ○定例会議(校内・運営指導委員会・コンソーシアム運営会議)の実施 ○教科科目横断型授業と夢現∞プロジェクト成果発表会の公開 |
|---|--|

令和5年度の成果と課題

- | | |
|---|--|
| <p>〈成果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○多角的な視点を持ち対話することの大切さを実感している(意識調査結果) ○多様な視点から指導・助言を頂き、産学官協働体制が強化された ○特色ある教育活動の成果を、広くPRすることができた | <p>〈課題〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○カリキュラムマネジメント(主に評価)に関して検討を継続する ○新たな関係機関との連携を密にし、専門的な視点から指導・助言を求める ○次年度も継続して、校外への公開授業等を推進する |
|---|--|